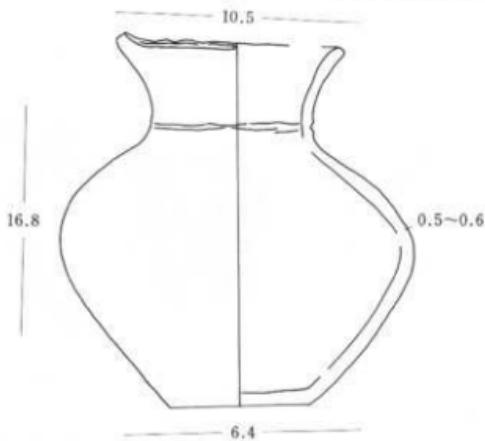
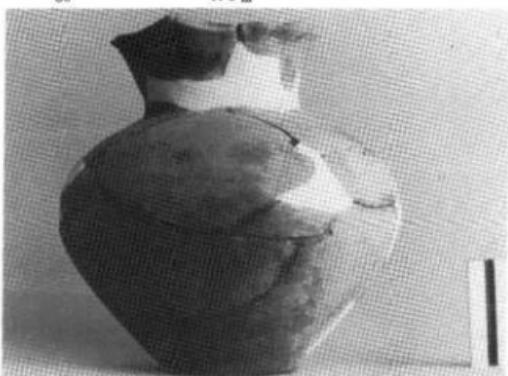


36

H.2.III

(壺形土器)



〔壺形土器〕-36（粗製）

☆ (36) は、H.2.III出土の第8群土器（大洞C2式）である。

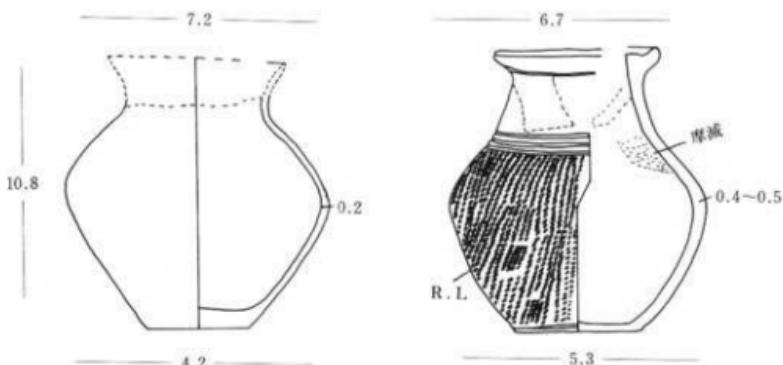
☆ 器形→(36) は、口縁に1個の突起と、その左・右に二叉山形突起が横に突出するもので、頸部はゆるく外反するが、ほぼ直立に近いものである。また、肩部は張らず、最大幅部は胴部中央上にある器形で、底面は平底である。

☆ 施文→口唇部の突起がある部分に、大洞A式に特有の沈線文と沈線の突起を認める。
また、頸部の下端に1条の沈線文がめぐるが、胴部は無文である。

☆ 色調は、内外面とも暗灰黄色、胎土・焼成とも良いが、焼成は軟質である。

37 H x IV
(壺形土器)

38 H x IV



〔壺形土器〕—37・38（粗製）

☆ (37) は、H x IV出土の第8群土器(大洞C2式)、(38) は、H x IV出土の第8群土器(大洞C2式)である。

☆ 器形→(37) は、口頸部が欠失したものであるが外反するものと推定される。肩部が張らず、最大幅部は胴部中央にあって、急にカーブして底部にいたる器形で、底面は「上げ底」である。(38) は、口縁が強く外反し、頸部はやや末広がりをしているもので、肩部はまるみをもつてふくらむ器形で、底面は「上げ底」である。

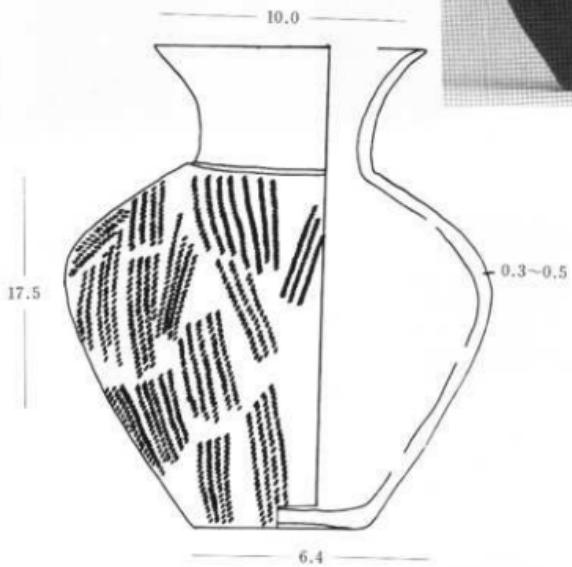
☆ 施文→(37) は、口頸部は不明、胴部は無文である。(38) は、口縁に突起をもつもので、頸部下端に2条の沈線文がめぐり、胴部には縄文が施文される。

☆ 色調は、(37) は、灰黄色(内外とも)、(38) は、灰黒色を呈する。胎土・焼成は良い。

39

H 2 III

(壺形土器)



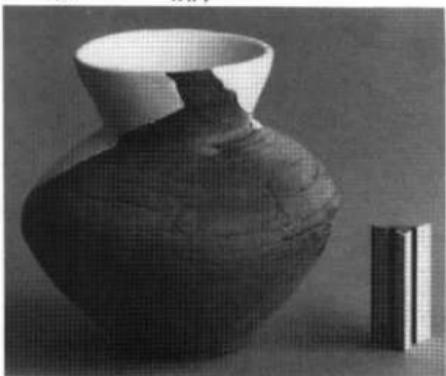
〔壺形土器〕-39 (粗製)

- ☆ (39) は、H 2 III 出土の第 8 群土器 (大洞 C 2 式) である。
- ☆ 器形→(39) は、口縁が平線で外反するが、頸部はほぼ直立するものである。肩部は張らず、最大幅部は胴部中央より上半にあり、ややふくらみをもちながら底部に接する器形である。なお、底面は「上げ底」である。
- ☆ 施文→口縁より頸部下端にかけては無文帯をなし、肩部の上端には沈線文が 1 条めぐり、胴部には 0 段多条の R・L 繩文が密に施文される。
- ☆ 色調は、外面暗黒色、内面黄褐色で、胎土にやや多く細砂を含むが、焼成は良い。

(壺形土器)

40

H x V



〔壺形土器〕-40（精製）

- ☆ (40) は、H x V 出土の第10群土器（大洞A式）である。
- ☆ 器形→このものの口頸部は欠失しているが、平縁で外反するものである。また、肩部は張らず、胴部中央上に最大幅部があり、やや急にカーブして底部に接する器形で、底面は「上げ底」ぎみである。
- ☆ 施文→肩部下に平行沈線文が3条、最大幅部に平行沈線文が3条めぐり、施文帶には「入り組工字文」が施文されるもので、そこには0段多条のL・R繩文が施文される。また、胴下半には同じ原体による斜行繩文が施文され、底面直上には2条の沈線文がめぐる。
- ☆ 色調は、外面灰褐色、内面黄褐色を呈し、胎土・焼成とも最良である。

41

H x V

(壺形土器)



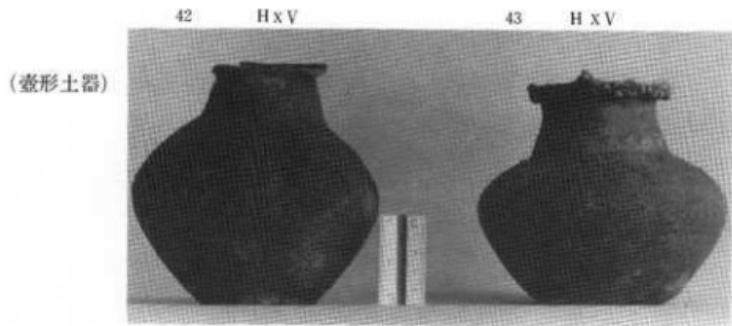
〔壺形土器〕-41（精製）

☆ (41) は、H x V 出土の第10群土器（大洞A式）である。

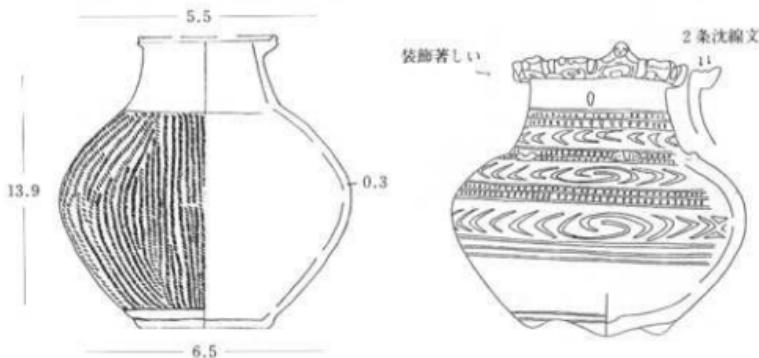
☆ 器形→(41) は、口縁が平縁で、小突起を1個つけるものである。また、小突起下の口縁には、左右対象の粘土粒を2個1対付くもので、口頸部はやや外反する。肩部は張らず、胴部の最大幅部はまるみを持って張るもので、胴下半部も、まるみをもつ器形である。なお、底面は「上げ底」である。

☆ 施文→口縁直下の内面に1条の沈線文がめぐる。また、外面の口縁直下に1条の沈線文が施文され、そこには上記の粘土粒が付される。頸部は無文で、肩部には3条、胴部の最大幅部にも3条の沈線文がめぐるもので、この間の施文帶には、「入り組み工字文」が施文され、細い繩文がある。胴下半には、同じ原体による繩文が施文され、底部上には、2条の沈線文がめぐる。

☆ 色調は、外面灰赤褐色、一部黒色、内面暗黄褐色を呈する。胎土に砂粒を多く含み、焼成もやや不良である。



(壺形土器)



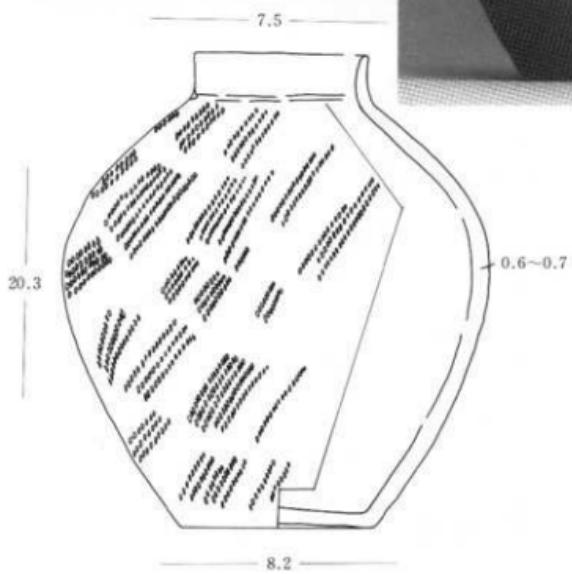
〔壺形土器〕—42・43（粗製・精製）

- ☆ (42) は、H x V 出土の第8群土器（大洞C2式）、(43) は、H x V 出土の第10群土器（大洞A式）である。
- ☆ 器形→口縁部が一部欠失しているが、水平に近い程外反し、頸部は末広がりのもので、最大幅部は胴中央部にある器形で、底面は平底である。(43) は、(42)と同じく口縁が水平に外反するもので、頸部も末広がりのものである。胴上半に最大幅部があり、胴下半はややふくらみのある器形で、4個の脚がつくものである。
- ☆ 施文→(42) は、口縁直下に1条の沈線文があり、肩部上端にも1条の沈線文が施文され、胴部には単軸捺糸文が縦位に施文されている。(43) は、口縁内に2条の沈線文、口縁には縦位の突起があり、粘土粒と粘土紐による装飾があり、頸部と胴部には、次の順に施文が繰り返されている。即ち、
無文帯—沈線文—低隆帯上の刺突文—矢羽根状文—沈線文—低隆帯上の刺突文（二重に）
→ 頸部 ← → 脇部下 ← → 頸部 ← →
と6対の粘土粒—矢羽根状文と、3個のX字状文、3個の「入り組み曲線文—聖山式的」—沈線文—低隆帯上の刺突文（二重）—矢羽根状文+X字状文+「入り組み曲線文—聖山式的」—3条の沈線文—無文帯—四脚付底面となっておりきわめて複雑な施文をしている。
- ☆ 色調は、(42) は、内外面とも灰黒色、(43) は、朱ぬり土器で赤灰色を呈する。胎土・焼成とも最良なるも、(43) は、軟質の焼成である。

44

H.3 III

(壺形土器)



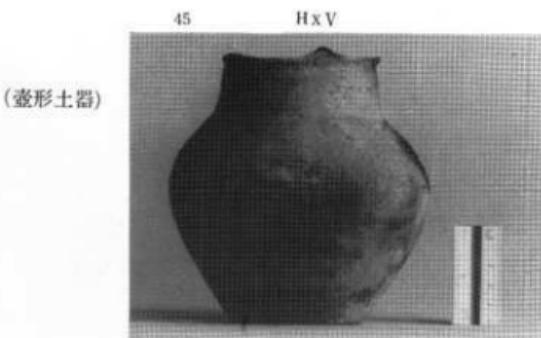
〔壺形土器〕—44（粗製）

☆ (44) は、H.3 III出土の第10群土器（大洞A式）である。

☆ 器形→この土器は、口縁が平線で、頸部が短く、いわゆる短頸壺の一つと考えられる。肩部は張らず、胴部の最大幅部は胴中央上部にある器形で、底面は「上げ底」を呈する。

☆ 施文→頸部と肩部との境に細い沈線が一部に認められる。肩部下には2段単節繩文が施文されるが、肩部付近には不整な条痕がある。

☆ 色調は、外面上半黄褐色一部黒色、内面黄褐色、胎土・焼成ともやや不良である。



〔壺形土器〕—45（精製）

- ☆ (45) は、H x V 出土の第 8 群土器（大洞 C₂ 式）である。
- ☆ 器形→口縁には 1 個の山型突起と、その左・右に横へ突出する粘土粒を（2 個 1 対のもの）を付すもので、頸部はやや末広がりのもので、肩部がゆるく下っている。また、胴部は中央上面に最大幅部をもつ器形で、底面は「上げ底」を呈する。
- ☆ 施文→無文のもので、ヘラ削りの整形痕がある。
- ☆ 色調は、灰黄褐色（内外面とも）で、胎土・焼成は最良である。

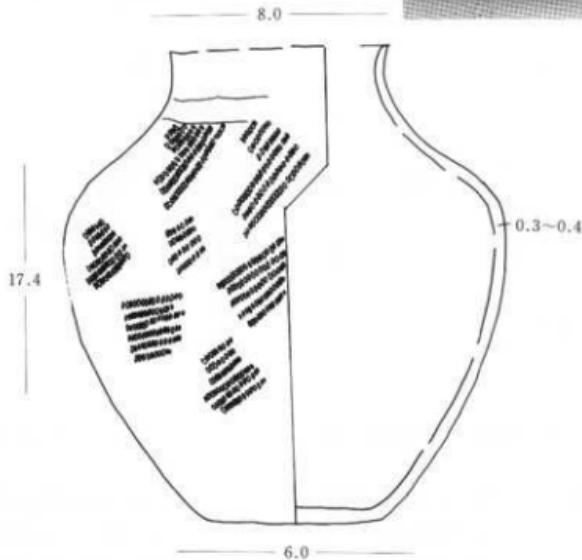
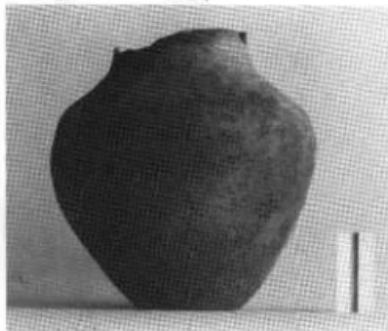
[各地区出土、土器] (晩期)

A.P.L.37

(壺形土器)

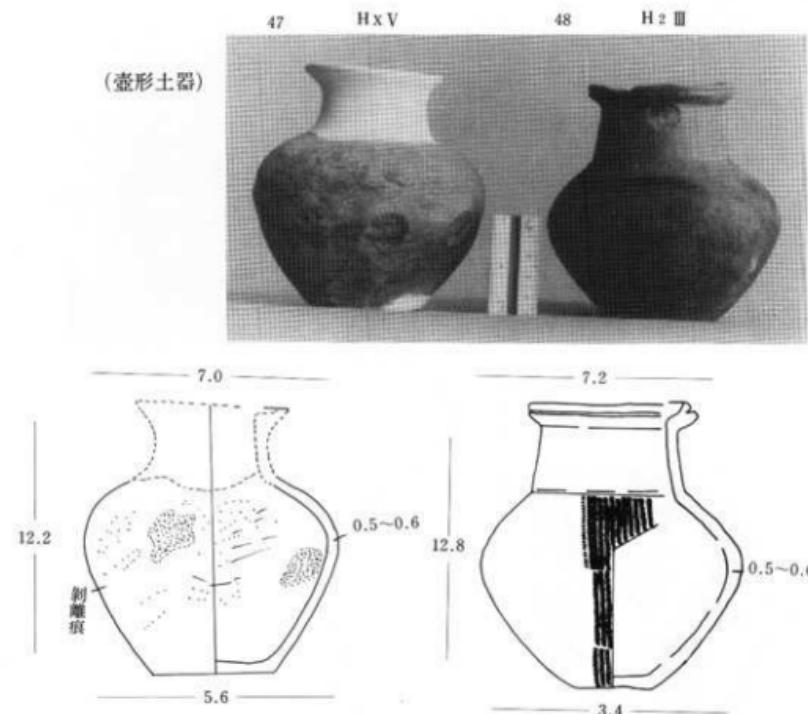
46

H x V



[壺形土器] -46 (精製)

- ☆ (46) は、H x V 出土の第 8 群土器 (大洞 C 2 式) である。
- ☆ 器形→口縁は平縁のものであるが一部欠損している。肩部は張らず、最大幅部は胴部上半にあって、ふくらみのある胴部である。底面は平底である。
- ☆ 施文→口頸部は無文で、肩部上に沈線文が 1 条めぐる。胴部には 0 段多条の L・R 繩文が施文される。
- ☆ 色調は、内外面とも暗褐色で、胎土・焼成はやや良である。



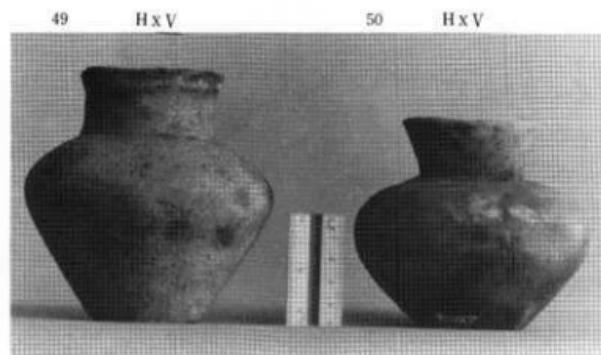
〔壺形土器〕 -47・48 (粗製)

☆ (47) は、HxV出土の第8群土器(大洞C2式)、(48)は、H2III出土の第8群土器(大洞C2式)である。

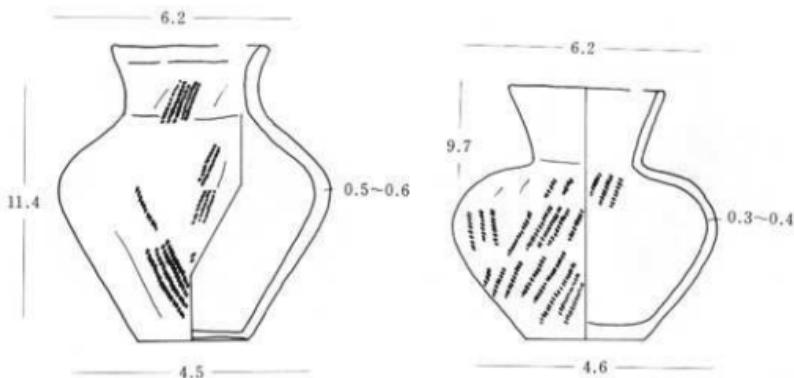
☆ 器形→(47)は、口頸部が欠失したものの、胴部のみ現存するが、最大幅部は胴中央上部にある器形である。なお、このものは厚くできており重量がある。(48)は、口縁が平縁で、水平に近く外反するもので、頸部はやや末広がりのものである。胴部のほぼ中央に最大幅部があり、底部は「上げ底」である。

☆ 施文→(47)は、無文で、(48)は、口縁内に沈線文が1条、口縁外面に沈線文が施文されるが、突起のある部位では、沈線が山型になっている。頸部は無文であるが、縦位のヘラ削り整形痕がある。また、胴部上には沈線文が1条、その下は単軸燃系文が施文される。

☆ 色調は、(47)は、明黄褐色、(48)は、外面灰黒色、一部明黄褐色、内面明赤褐色である。胎土・焼成は、(47)は胎土に砂粒を含むが焼成は良、(48)は、胎土・焼成とも最良である。



(壺形土器)



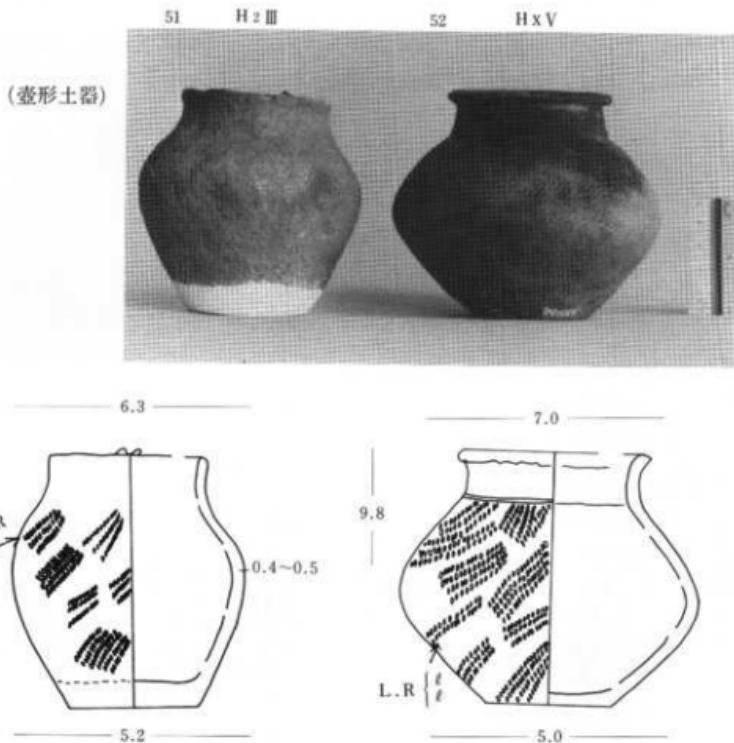
〔壺形土器〕—49・50（粗製）

☆ (49) は、H x V 出土の第8群土器（大洞C2式）、(50) は、H x V 出土の第8群土器（大洞C2式）である。

☆ 器形→ (49) は、口縁が小波状を呈するもので、口縁が肥厚し、頸部との境に段を有するものである。頸部は直立し、肩の張らない器形で、最大幅部は胴中央より上にあって、急にしほまる器形で、底面は「上げ底」である。(50) は、口縁は平縁で、頸部はゆるく外反するもので、胴部中央に最大幅部があって、強くふくらむ器形である。なお、底面は「上げ底」である。

☆ 施文→ (49) は、頸部の下端に浅い沈線文が2条めぐる。胴部にはR・L繩文が施文される。(50) は、口頸部は無文で、胴部には0段多条のL・R繩文が施文されている。

☆ 色調は、(49) は、内外面とも明黄褐色、(50) も明黄褐色を呈する。



〔壺形土器〕 -51・52 (粗製)

- ☆ (51) は、H 2 III出土の第8群土器(大洞C 2式)、(52) は、H x V出土の第8群土器(大洞C 2式)である。
- ☆ 器形→(51) は、口縁は平縁であるが、二叉山型突起が付くもので、口縁から頸部にかけては、ゆるく外反するもので、最大幅部は胴部中央よりやや上有る器形で、底面は欠損したものである。(52) は、口縁は平縁で、水平に近い程外反し、頸部は短いが末広がりのもので、胴部中央下に最大幅部がある器形のもので底面は平底である。
- ☆ 施文→(51) は、口縁部は無文で、胴部には0段多条の縄文が施文される。(52) は、頸部は無文で、肩部上には沈線文が1条めぐる。胴部には2段單節L・R縄文が施文される。
- ☆ 色調は、(51) は、外面茶褐色、内面暗褐色、(52) は、外面暗黒色、内面黒色で、胎土・焼成は(51) はやや不良、(52) は良好である。

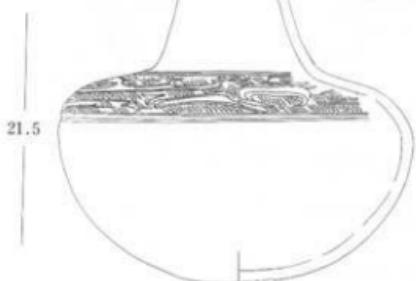
53

H x V

（壺形土器）



9.5



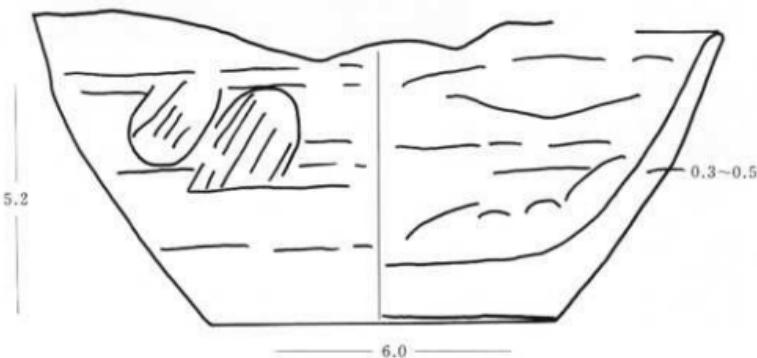
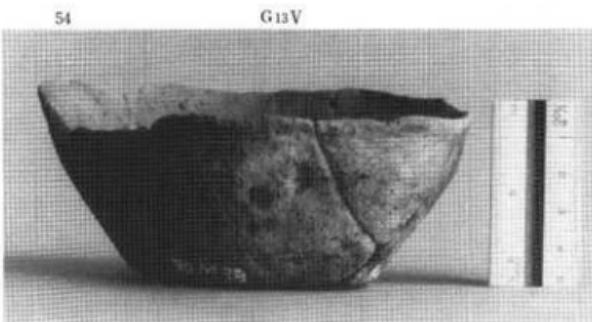
七口絵土器

〔壺形土器〕-53（精製）

- ☆ (53) は、H x V 出土の第8群土器（大洞C 2式後半）である。
- ☆ 器形→口縁は波状口縁で、小突起をもち、水平に近く外反する。頸部は長く末広がりで、肩部は平面に近く、最大幅部は胴中央より上方にあって、胴部はふくらみを持って底部に接する器形である。底面は隆帯を持ち、中高のものである。
- ☆ 施文→口縁下より肩部までは無文で研磨されたものである。肩部下には3条の沈線文、最大幅部には、2条の沈線文が施文され、この間の施文帶には浮文による文様があり、その上面には0段多条のR・L繩文が施文されている。この浮文と組み合う沈線文は、曲線文と「入り組み工字文」の前段階を想定できる施文がある。胴部下半は朱ぬりの他は無文研磨帶である。また、底面には沈線文がめぐっている。
- ☆ 色調は、器全体が朱ぬり土器で、内面にも朱がぬられたものである。胎土・焼成とも最良。
- ※ このように大形朱ぬり土器は稀少なものである。

[各地区出土、土器] (土師器—坏形)

A.P.L42



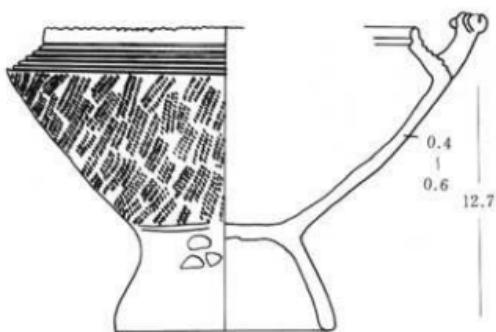
[坏形土師器] -54

- ☆ (54) は、A S-C区G13V出土の坏形土師器である。
- ☆ 器形→このものの口縁は一部欠失しているが、平縁で、口縁はやや外反し、肩部に段があるもので、ケズリ痕を認める。なお底面には「糸切り痕」ではなく、擦痕がある。また、胎土に細砂を含むがロクロの使用はない。
- ☆ 色調は、明黄褐色、一部に赤変した部位を認める。ナデ方向は横である。

（台付鉢形土器）



15.6



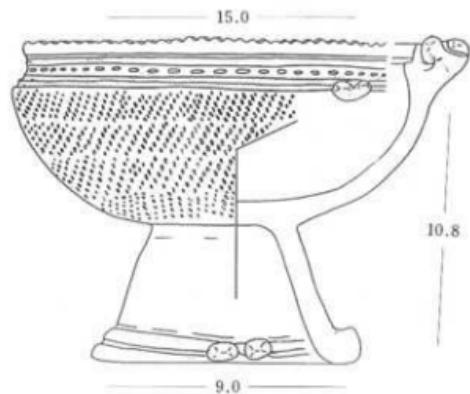
8.8

〔台付鉢形土器〕—55（粗製）

- ☆ (55) は、H x V 出土の第 7 群土器（大洞 C 1 式）である。
- ☆ 器形→この土器は、口縁が小波状を呈し、肩部が強く張るものである。胴部はや、ふくらむ器形で、台部は不明である。
- ☆ 施文→小波状をなす口縁の直下に沈線文が 6 条あるが、把手の部位で中断しており、肩部には「把手」が付けられるが、その把手は、長く高いものである。胴部には 2 段単節 L・R 糸文が密に施文され、台部は不明である。
- ☆ 色調は、鉢部暗黄褐色、一部明黄褐色、胎土・焼成は良く堅緻である。

〔各地区出土、土器〕（晩期）

A.P.L44



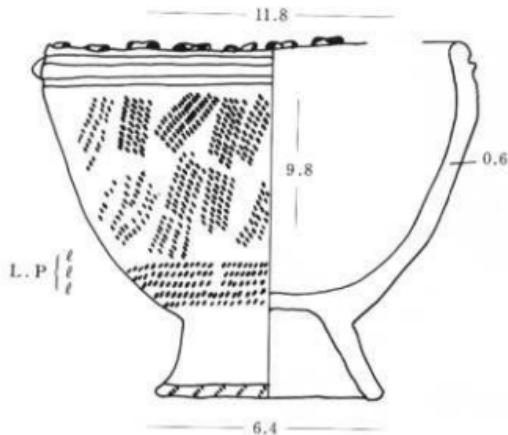
〔台付鉢形土器〕-56（粗製）

- ☆ (56) は、H x V出土の第7群土器（大洞C1式）である。
- ☆ 器形→口縁は小波状を呈し、肩部が強く張る器形で台部へ接する胴部はふくらみを持つ器形で、台部は末広がりのものである。また、把手が付くが、口縁よりや、高いものである。
- ☆ 施文→やや内傾する口縁下に沈線文が1条めぐり、肩部に2条の沈線がある。胴部には細い0段多条の2段單節L・R繩文が施文される。台部には、2こ1対の粘土粒がつけられる。
- ※ この台付土器の器形・施文は、(大洞C1式)の一タイプであるが大洞C2式直前のものと思われる。

57

H. 2 Ⅲ

(台付鉢形土器)



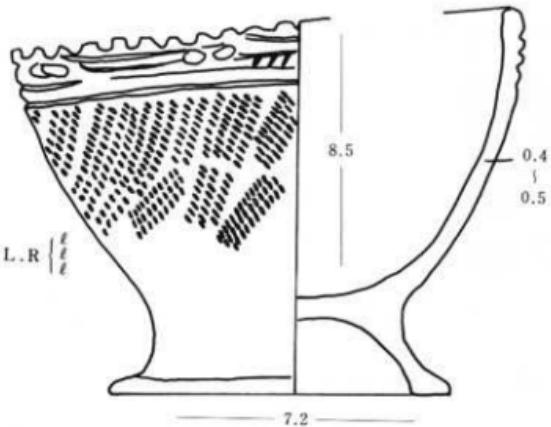
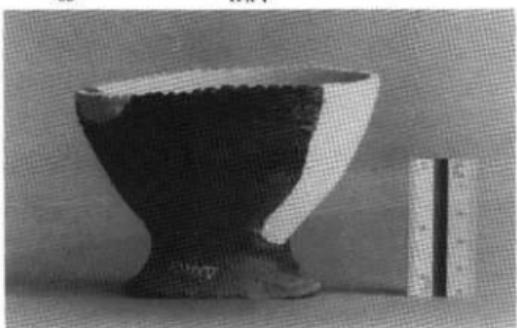
〔台付鉢形土器〕 -57 (粗製)

- ☆ (57) は、H. 2 Ⅲ出土の第 7 群土器 (大洞 C 1 式) である。
- ☆ 器形→口縁には、裝飾部があるため、小波状を呈する。また、口縁下には 2 ケ 1 対の縦位になる粘土粒をもつもので、鉢部はふくらみのある器形で、台部は末広がりの器形である。
- ☆ 施文→口縁下に 2 条の沈線文がめぐり、胴部には 0 段多条の L・R 縄文が施文され、台部の下端には縄文が施文される。
- ☆ 色調は、黒褐色、一部灰黄色、内面は暗褐色を呈する。胎土・焼成は良で堅緻なものである。

58

H x V

〔台付鉢形土器〕



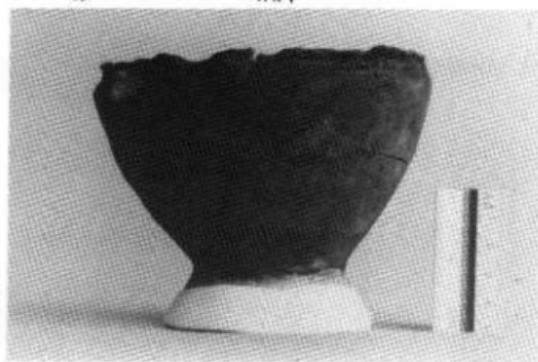
〔台付鉢形土器〕—58（粗製）

- ☆ (58) は、H x V出土の第7群土器（大洞C1式）である。
- ☆ 器形→口縁は小波状を呈し、やや内傾する。腹部はややふくらみをもちながら台部に接する器形である。台部は末広がりで下端が開くものである。
- ☆ 施文→口縁直下に沈線文が3条あり、上位の沈線文は、口縁の刻目から斜行する。
(多分大洞B・C式の名残りか) 2段、3段の沈線には、交互に刺突文を施文している。腹部には0段多条の縄文（L・R）が施文され、台部は無文であるが、下端に沈線文が1条めぐる。
- ☆ 色調は、鉢部灰黒色、台部は灰褐色、胎土・焼成は良く堅緻である。

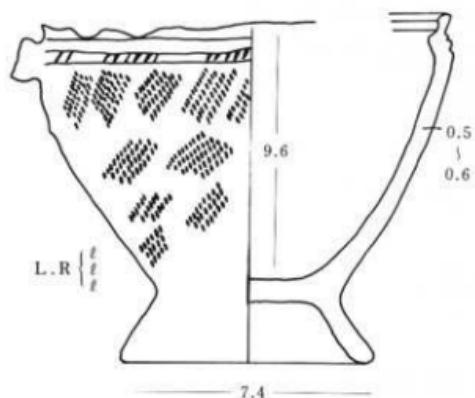
59

H x V

(台付鉢形土器)



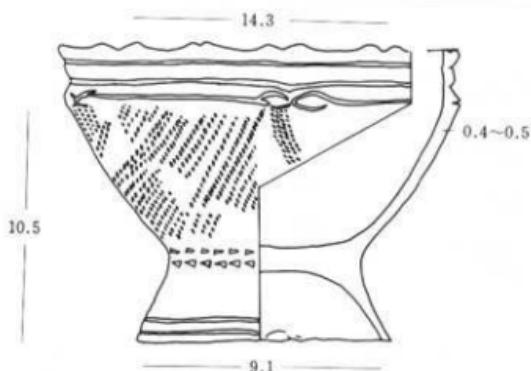
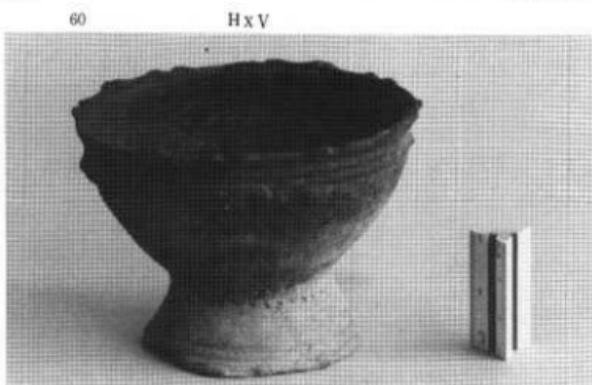
— 11.2 —



〔台付鉢形土器〕 - 59 (粗製)

- ☆ (59) は、H x V 出土の第 7 群土器 (大洞 C 1 式) である。
- ☆ 器形→口縁は、小波状を呈し、肩部は段をもって張る器形で、胴部はわずかにふくらむものである。台部は無文である。台部の下端は無文と思われるが欠失している。
- ☆ 施文→口縁直下に細い沈線文が 3 条あり、その間に刺突文帯をもつもので、胴部には 0 段多条の L・R 縄文が施文されるものである。
- ☆ 色調は、外面黒褐色、内面上半黒褐色、下半黄褐色を呈する。胎土・焼成は、やや不良である。

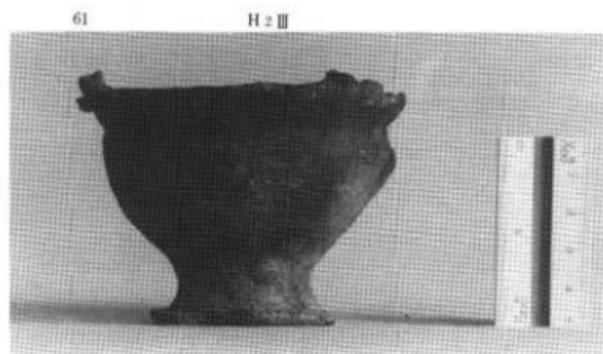
(台付鉢形土器)



〔台付鉢形土器〕 -60 (粗製)

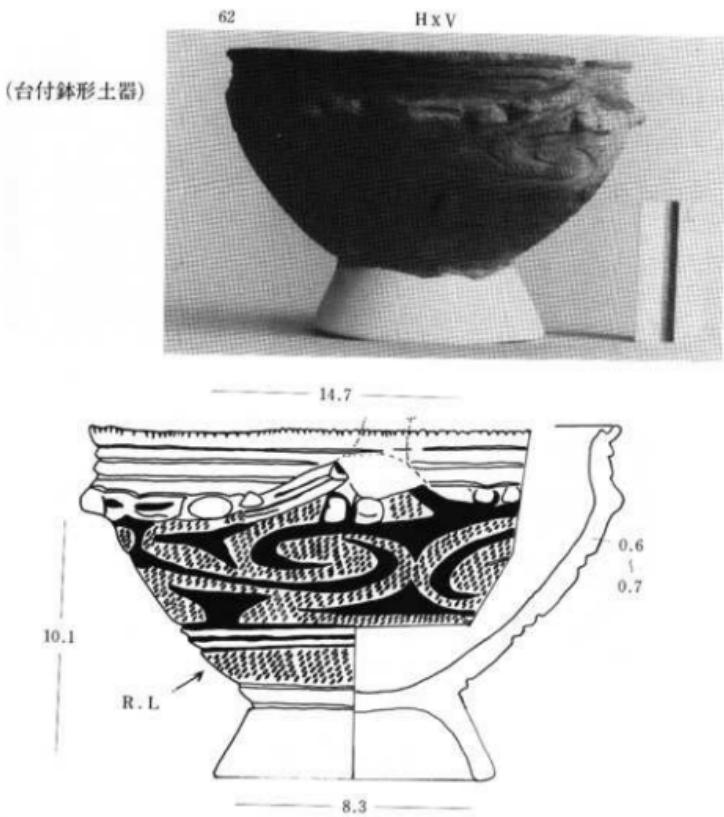
- ☆ (60) は、H x V 出土の第10群土器 (大洞 A 式) である。
- ☆ 器形→口縁には、2叉山形突起を4個、その間に2個1対の突起を8個付すもので、口縁は外反し、肩部はやや張るもので、そこには2個1対の粘土粒を4対付くものである。胸部はややふくらむ器形で、台部は末広がりでやや大きく開くものである。
- ☆ 施文→口縁直下から肩部へかけては、平行沈線文が3条めぐり、3条目には粘土粒を付すものである。胸部にはやや燃りのゆるい0段多条L・R縄文があって、台部との接点には二重の刺突文がめぐる。台部は無文帶と下端に2条の沈線文が施文されている。また、口縁内側には沈線文が1条あり、二叉山形突起のうち、1個には山形の沈線がのびるタイプである。
- ☆ 色調は、上面黒褐色、下半黄褐色を呈し、台部は赤変している。胎土・焼成は、やや不良である。

(台付鉢形土器)



〔台付鉢形土器〕—61（粗製）

- ☆ (61) は、H 2 III出土の第8群土器（大洞C 2式）である。
- ☆ 器形→口縁には、二叉にわかれた縦位の突起が3個つき、その間に横に突出する二叉にわかれた突起がつくもので、口頸部は外反する。胴部との境は段をもっており、胴部はふくらみのある器形である。台部はほぼ直立するが、下端が横に開くものである。
- ☆ 施文→口唇部に沈線文1条、他は無文である。
- ☆ 色調は、内外面とも黒褐色で胎土・焼成とも良く、堅いものである。



〔台付鉢形土器〕 -62 (精製)

- ☆ (62) は、H x V 出土の第 9 群土器 (大洞 C 2 ~ A 式 → 假称) である。
- ☆ 器形 → 口縁は平縁なるも刻目をもち外反する。また肩部には、欠失しているが「把手」が付くもので、さらに、横に突出する山型突起と、2 個 1 対の粘土粒を付すものである。胸部はかるくふくらむ器形で、台部は欠失しているため不明である。
- ☆ 施文 → 口縁下に浅い沈線文が 3 条めぐり、その 3 条目が横に突出する山型突起に山形にのびる。また、突起と粘土粒の間には、短沈線があるので、胸部には「入り組み曲線文」が浮き彫りされ、その上面には 2 段単節 R・L 繩文が施文される。胸下半には 3 条の沈線文があって文様帶を区画し、台部上の胸部下半には、上記の原体による繩文が施文されている。台部にも文様があるように認められるが不明である。
- ☆ 色調は、外面黒褐色、内面上半灰褐色、下半黄褐色を呈する。胎土・焼成は良い。

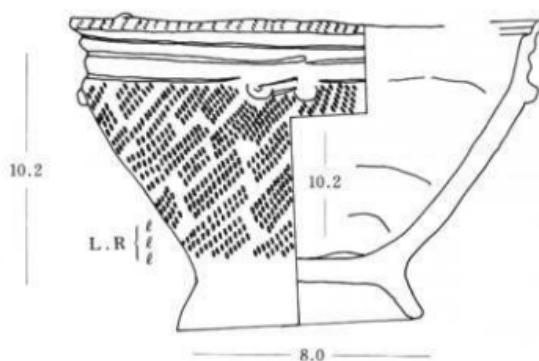
63

HxV

（台付鉢形土器）



14.8



〔台付鉢形土器〕—63（粗製）

- ☆ (63) は、HxV 出土の第10群土器（大洞A式）である。
- ☆ 器形→口縁は、平縁なるも山型の小突起が4個つくもので、肩部には2個1対の粘土粒が4対付けられているが、やや下向きである。胴部はわずかにふくらみ、台部は末広がりのものである。
- ☆ 施文→口縁端には、縄文が施文され、頸部には3条の沈線文がめぐるもので、肩部の粘土粒には短沈線がのびるもので、胴部には0段多条のL・R 縄文が施文される。台部は無文である。
- ☆ 色調は、外面灰黒色、台部は赤褐色、内面上半黒色、下半黄褐色を呈する。胎土・焼成は良である。

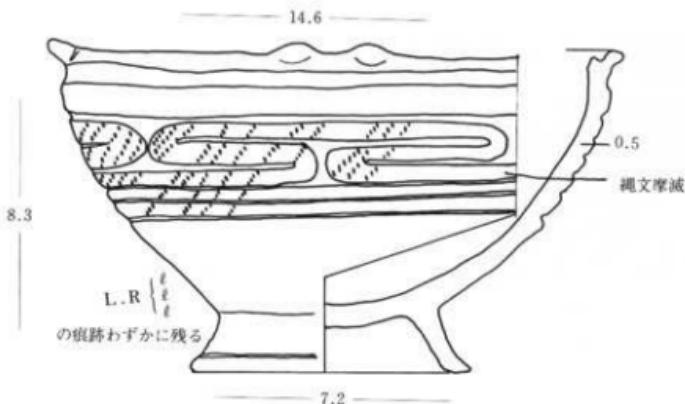
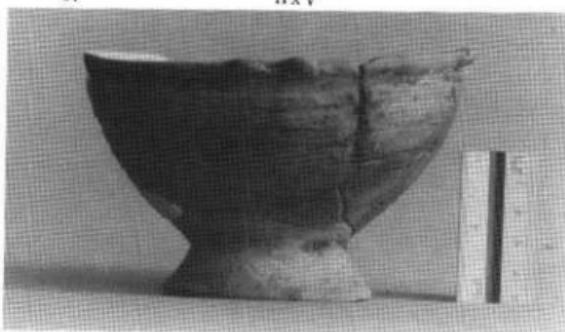
〔各地区出土、土器〕（晩期）

A.P.L.52

64

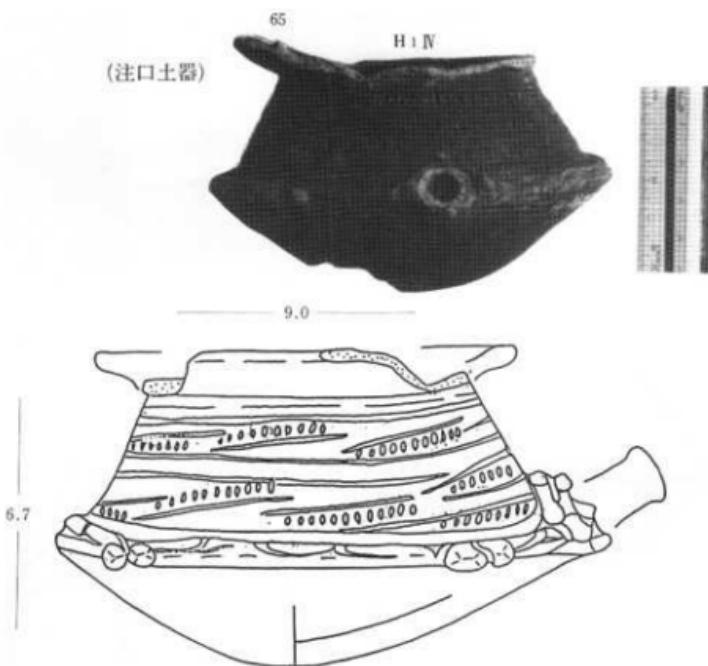
H x V

〔台付鉢形土器〕



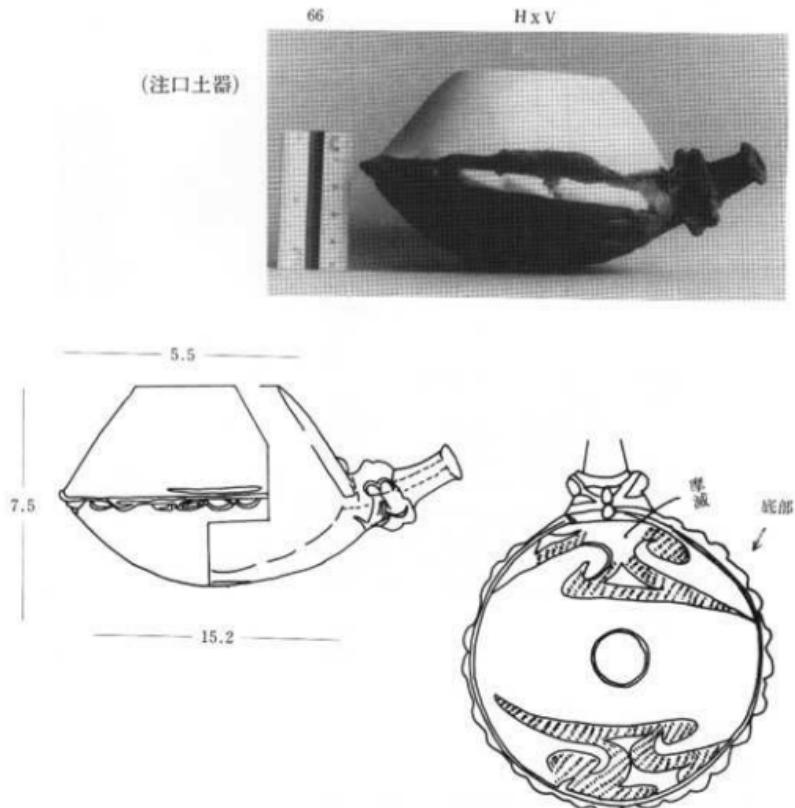
〔台付鉢形土器〕—64（精製）

- ☆ (64) は、H x V出土の第10群土器（大洞A式）である。
- ☆ 器形→口縁は平縁であるが、2個1対の突起が横方向に付けられ、口縁は外反する。
- ☆ 肩部は張らず、胴部はゆるくふくらむ器形で、台部は末広がりのものである。
- ☆ 施文→口唇部に沈線文が1条めぐり、2個1対の突起のうち1個に山型にのびる。口縁下に太い沈線文が1条めぐり、胴部中央下には2条の沈線文があつて文様帶を区画し、胴部下半は無文帶で、台部も無文である。胴部上半には「入り組工字文」が施文され、隆起帶には、縄文（マツツのため不明）が施文される。
- ☆ 色調は、内外面とも暗黄褐色、胎土・焼成はやや不良である。



〔注口土器〕 -65 (精製)

- ☆ (65) は、H1 IV 出土の第7群土器 (大洞C1式) である。
- ☆ 器形→このものの口頸部は現存約程度であるが、口縁部は外反しつつ内傾するものである。また、頸部から胴上半は直線的に内傾し、最大幅部は強く横に突出するもので、底部は丸底である。
- ☆ 施文→頸部～胴部上半には、7本の浅い沈線文があり、2・3本目に交互に刺突文がある。4・5本目にも交互に刺突文がある。さらに、6・7本目にも交互に刺突文があるので、胴中央部には注口部があるが欠失し、注口の左右には、2個1対の粘土粒と、沈線による文様がある。また、胴下半の注口部下には、沈線文と三叉文的な施文がある。
- ☆ 色調は、外面黒褐色、内面上半黒色、下半黄褐色で、胎土・焼成は最良である。



〔注口土器〕—66（精製）

- ☆ (66) は、H x V 出土の第7群土器（大洞C1式）である。
- ☆ 器形→口縁～胴部上半は欠失しているため、不明である。胴上半と下半の注口のある部位は横に突出し、注口部の左・右には2個1対の粘土粒の配置があり、沈線文もある。胴下半は、ふくらみをもって底部に接する器形で、底部は丸底を呈する。
- ☆ 施文→口縁～胴部上半には、施文があるように認められるが不明。注口部下には「X字状文」がある。なお、胴下半部の直下には沈線文が1条めぐる。
- ☆ 色調は、外面黒色で研磨されており、内面灰黑色を呈する（現存部）。胎土・焼成は最良である。

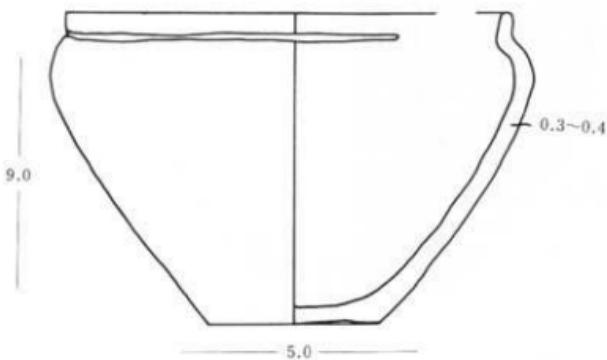
67

H 1 V

(鉢形土器)



12.9



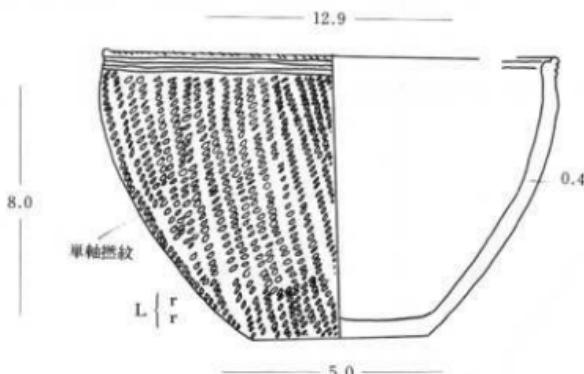
〔鉢形土器〕 -67 (粗製)

- ☆ (67) は、H 1 V 出土の第3群土器 (十腰内I式) である。
- ☆ 器形→口縁は、平縁で外反し、肩部はまるみを持って張り、胸部もゆるく湾曲する器形で、底面はや、「上げ底」である。
- ☆ 施文→口縁部下に1条の不整な沈線文が施文されるほかは無文のものである。
- ☆ 色調は、外面上半が赤褐色、下半は灰黒色、内面は茶褐色を呈する。胎土・焼成はやや不良なものである。

68

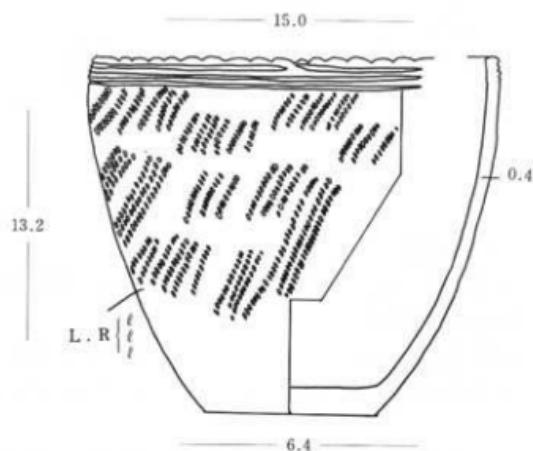
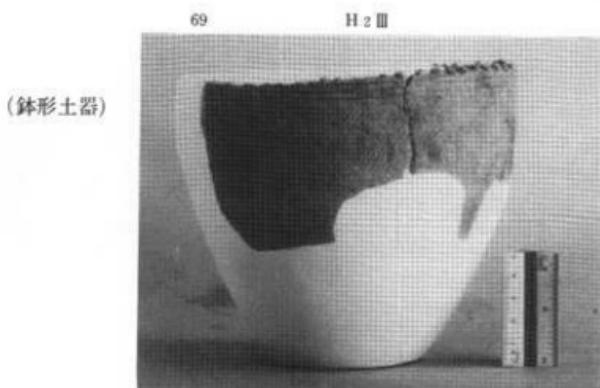
H : V

（鉢形土器）



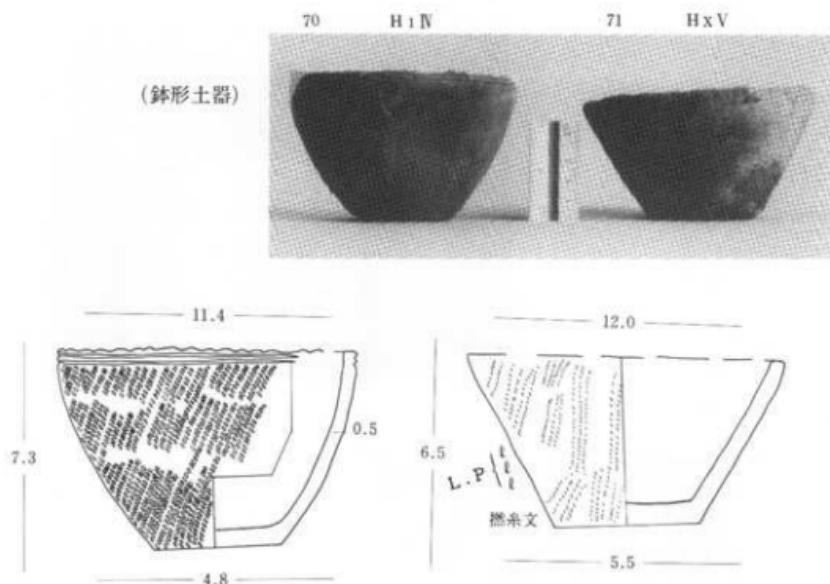
〔鉢形土器〕-68（粗製）

- ☆ (68) は、H : V 出土の第 8 群土器（大洞 C 2 式）である。
- ☆ 器形→この土器の口縁は、不整な平縁のもので、わずかに外反する。肩部は張らず、胴部はふくらみのある器形で、底面は平底のものである。
- ☆ 施文は、口縁直下に 2 条の沈線文がある。胴部には、単軸撚糸文 (L・r) が施文されるものである。
- ☆ 色調は、外面黒褐色、内面上半黒褐色、下半黄褐色を呈する。



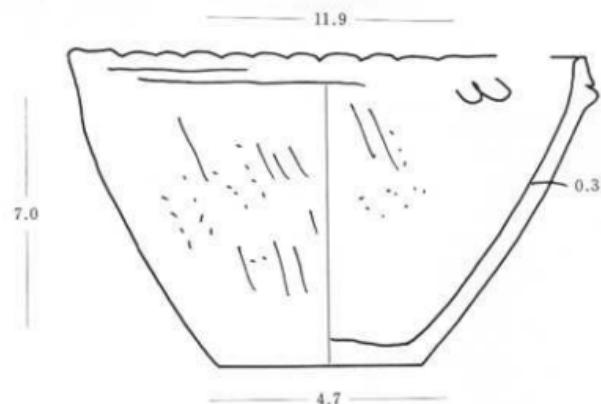
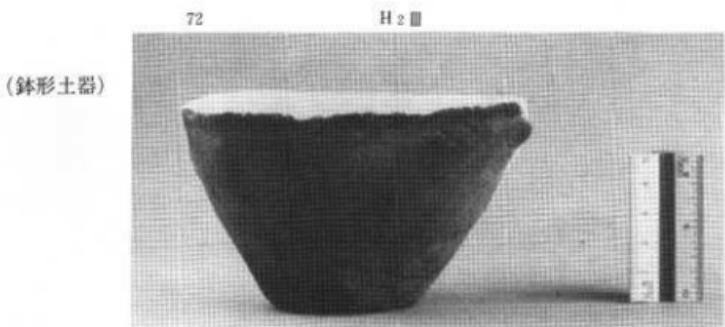
〔鉢形土器〕—69（精製）

- ☆ (69) は、H 2 III出土の第7群土器（大洞C 1式）である。
- ☆ 器形→現存部が約半程度であるが、口縁は小波状を呈し、肩部が張らず、胴部がややふくらむものと思われる。胴下半は欠失しているため、その他は不明である。
- ☆ 施文→口縁下にやや細い沈線文が3条めぐる。胴部には0段多条のL・R繩文が施文される。
- ☆ 色調は、外面茶褐色、内面灰茶褐色を呈する。胎土・焼成は良く堅緻である。



〔鉢形土器〕—70・71（再生土器）（粗製）

- ☆ (70) は、H 1 IV出土の第7群土器（大洞C 1式）である。また、(71) は H x V 出土の再生された土器で、型式名は不明である。
- ☆ 器形→ (70) は、口縁は小波状を呈し、肩部はまるく、胸部もややふくらむ器形で、底面は平底である。(71) は壺形土器の胴下半部のものと推定されるが、上面が擦って整形されているものである。
- ☆ 施文→ (70) は、口縁下に2条の沈線文がめぐり、胸部には0段多条のL・R繩文が施文されている。(71) は、きわめて細かい0段多条のL・R繩文が施文されている。
- ☆ 色調は、(70) は、外面黒褐色一部赤褐色、内面灰黒色を呈する。胎土・焼成は良い。(71) は外面上半は茶褐色、下半は黒色、内面は明茶褐色を呈する。胎土・焼成は、やや不良である。



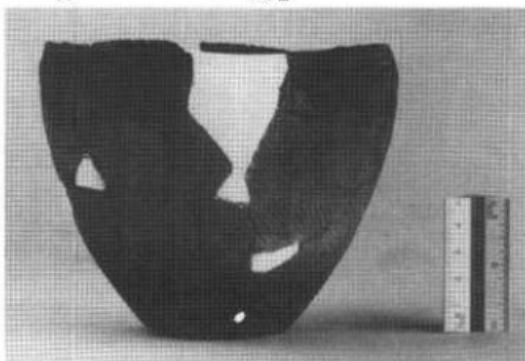
〔鉢形土器〕-72（粗製）

- ☆ (72) は、H 2 Ⅲ出土の第7群土器（大洞C1式）である。
- ☆ 器形→口縁は小波状を呈し、肩部は張り、粘土粒を付するもので、胴部はわずかにふくらむ器形で底面は平底である。
- ☆ 施文→口颈部は無文で、胴部には細い条線文がわずかに施文されている。
- ☆ 色調は、外面灰褐色、内面も灰褐色であるが、一部黒褐色を呈する。胎土・焼成はやや不良である。

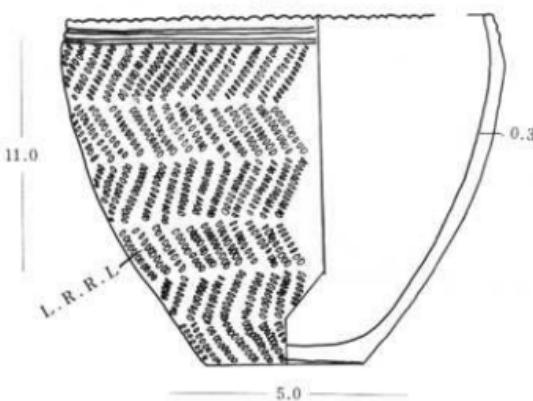
73

H 2 III

〔鉢形土器〕



13.6



〔鉢形土器〕-73（粗製）

- ☆ (73) は、H 2 III出土の第7群土器（大洞C 1式）である。
- ☆ 器形→口縁は小波状を呈し、やや内傾するもので、肩部はまるく、胸部もふくらむ器形のもので、底面は「上げ底」のものである。
- ☆ 施文は、口縁下に2条の沈線文がめぐり、胸部には羽状繩文が施文されているもので、羽状繩文の施文されている土器は、稀少である。
- ☆ 色調は、外面黒褐色、下半黄褐色、内面は黒色で煮沸痕が付着する。胎土・焼成は良いものである。

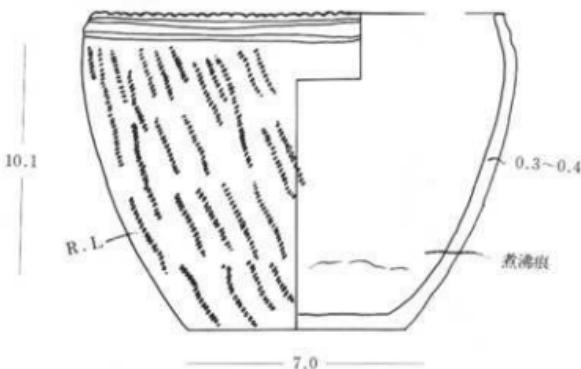
74

H X V

（鉢形土器）



13.3

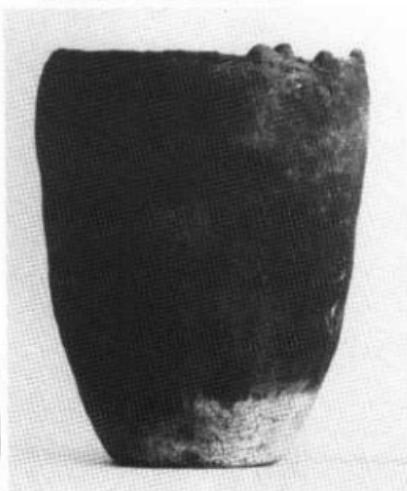
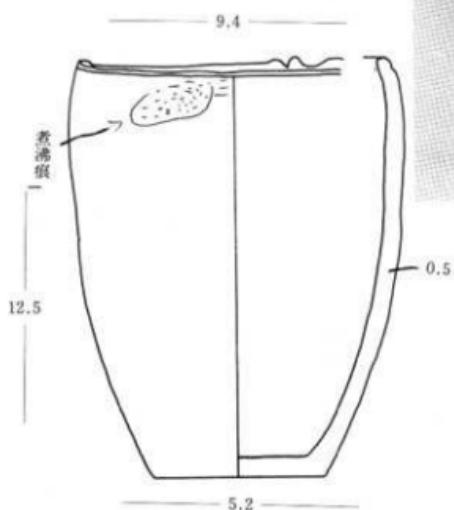


〔鉢形土器〕—74（粗製）

- ☆ (74) は、H X V 出土の第 7 群土器（大洞 C 1 式）である。
- ☆ 器形→口縁には細い刻目があり、口縁～肩部へかけては内傾するもので、胸部もゆるくふくらむ器形で、底面は欠失している。
- ☆ 施文→口縁下に 2 条の沈線文がめぐり、胸部には 0 段多条の R・L 繩文が施される。
- ☆ 色調は、外面上半灰黒色、下半暗褐色、内面黒色を呈する。胎土・焼成とも良く堅緻である。

75 H x V
15 20 25

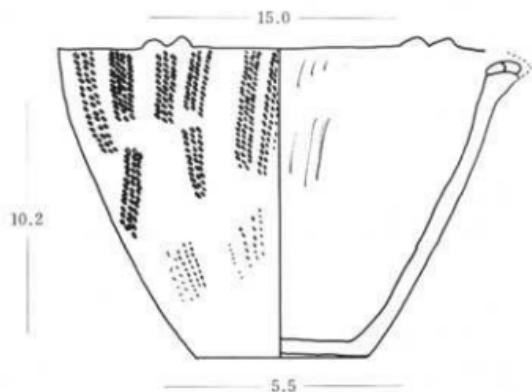
(深鉢形土器)



〔深鉢形土器〕-75 (粗製)

- ☆ (75) は、H x V出土の第8群土器（大洞C2式）である。
- ☆ 器形→口徑に比して器高があるので、円筒形の器形である。口縁は平縁なるも、二叉山型突起が3対つくもので、底面は平底である。
- ☆ 施文→無文土器で、器外面にはケズリによる整形痕がある。
- ☆ 色調は、外面は黒褐色で煮沸痕が付着しており、内面も同様、底部直上は、内外とも黄褐色で、胎土・焼成はやや良い。

(片口付鉢形土器)



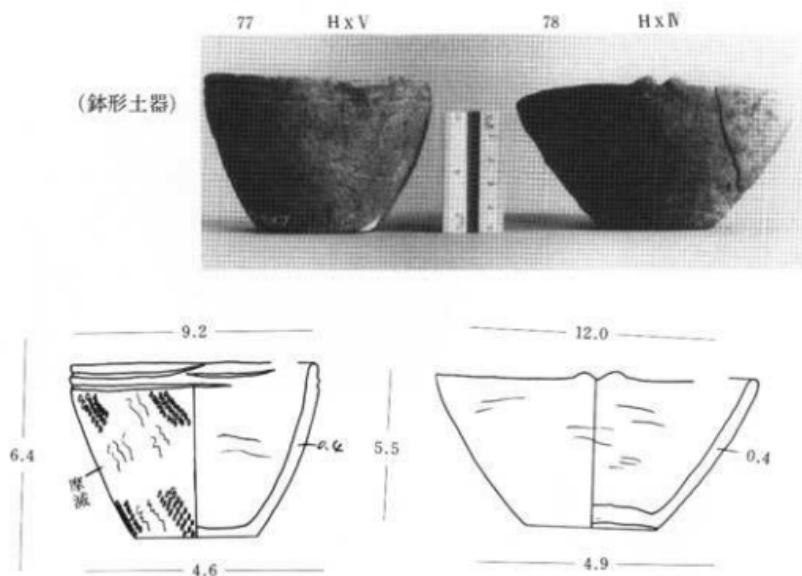
〔片口付鉢形土器〕-76（粗製）

☆ (76) は、H x V 出土の第 8 群土器（大洞 C 2 式）である。

☆ 器形→口径に比して、底径が小さいもので、肩部も張らず、直線的に底部に接する器形である。口縁は平縁であるが、二叉山型突起が 4 個付くもので、片口部の中央より先端は欠失している。なお、底面はやや「上げ底」である。

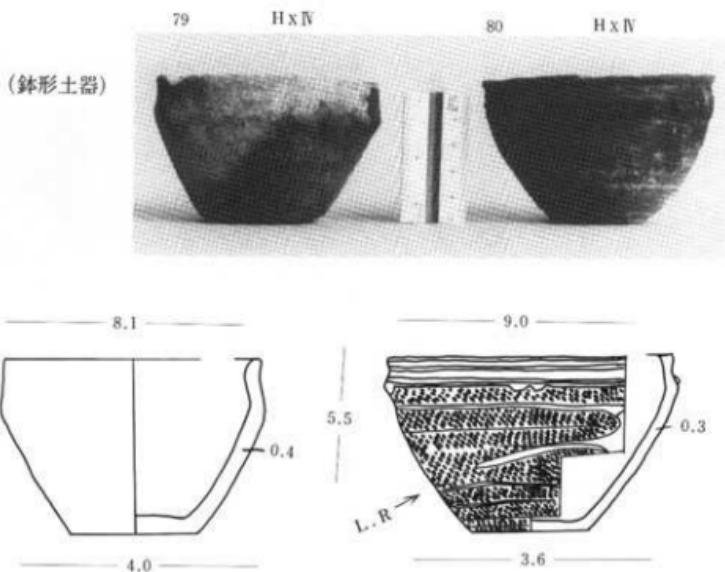
☆ 施文→口縁直下より底部まで、0 段多条の L・R 縄文が不整に施文されている。

☆ 色調は、外面黒褐色、内面も黒褐色であるが、底は黄褐色を呈する。胎土・焼成はやや良い。



〔鉢形土器一小形〕-77・78 (粗製)

- ☆ (77) は、HxV出土の第8群土器(大洞C2式)。(78)もHxN出土の第8群土器(大洞C2式)である。
- ☆ 器形→(77)は、口縁は平縁なるも小突起を付するもので、わずかに内傾するものである。肩部は張らず、ゆるくふくらむ胴部で底面は「上げ底」である。(78)は、平縁であるが、口縁に2個1対の小突起がつくもので、口径が大きく、底径が小さい器形で、底面は不整な平底をなす。
- ☆ 施文→口縁下に2条の沈線文がめぐり、その一端は口縁上端にのびている。胴部には0段多条のL・R繩文が施文される。(78)は無文土器である。
- ☆ 色調は、(77)は、外面暗褐色、一部火を浴びて赤変している。内面明燈色を呈する。胎土・焼成は、やや不良である。(78)は、外面灰黒色、一部赤変している。内面は黒褐色である。胎土・焼成は良いが整形が悪い。



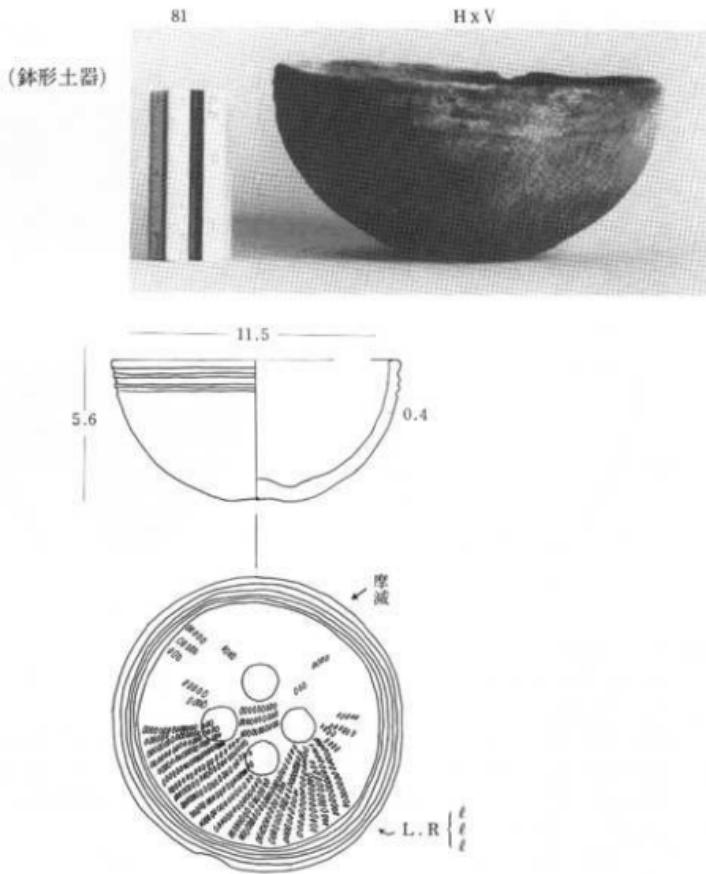
〔鉢形土器一小形〕—79・80

☆ (79) は、HxIV出土の第7群土器（大洞C1式）である。(80)は、HxIV出土の第10群土器（大洞A式）である。

☆ 器形→(79)は、不整な平縁で、口縁には刻目状の痕が認められる。口縁はやや内傾し、肩部が段をもって張る器形で、底面はやや「上げ底」である。(80)は、口縁が外反し、肩部には、2ヶ1対の横に突出する突起を3対付くもので、肩部はゆるく湾曲し、胴部もややふくらむ器形で、底面は「上げ底」である。

☆ 施文→(79)は無文土器であるが、ケズリ整形が、内外面に認められる。(80)は、口縁下に2条の沈線文があり、突起の一つに山型にのびている。突起間には1条の沈線文があり、胴部中央下に2条の沈線文が不整にめぐり、施文帶には、未完成な「入り組み工字文」が一単位のみ施文される。また、細い2段單節L・R繩文が施文されている。即ち、繩文が施文された後、沈線文・「入り組み工字文」が施文されたものである。また、底部上にも2条の沈線文がめぐるものである。

☆ 色調は、(79)は、外面黄褐色、一部黒色、内面は明黄褐色で、胎土・焼成は良く堅い。(80)は外面黒褐色、内面黒色で煮沸痕が付着している。



〔鉢形土器〕—81（粗製）

☆ (81) は、H x V 出土の第 8 群土器（大洞 C 2 式）である。

☆ 器形→口縁は平縁で、鉢形というよりも塊形と言ったほうが適切な器形である。また、このものには、円形の低い四脚がついている。

☆ 施文→口縁下には、浅い沈線文が 3 条めぐり、胴部から脚部までは、2 段単節 L・R 繩文が施文される。

☆ 色調は、外面、明赤褐色、一部灰黒色、内面、黄褐色を呈する。胎土・焼土は良い。

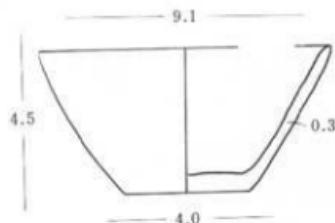
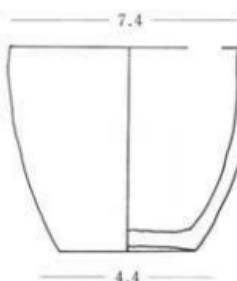
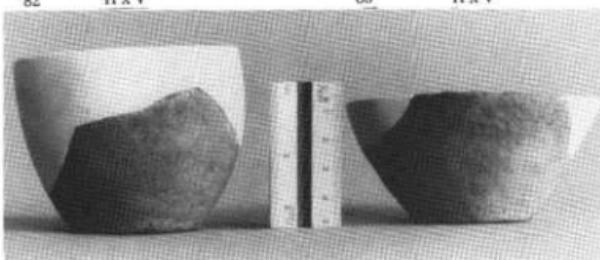
[各地区出土、土器] (晩期)

A.P.L.67

82 H x V

83 H x V

(鉢形土器)



[鉢形土器一小形] -82・83 (粗製)

☆ (82) は、H x V出土の第3群土器(十腰内I式)、(83)は、H x V出土の第3群土器である。

☆ 器形→(82)は、現存約 $\frac{1}{2}$ 程度で、口頸部は、欠失している。胴部は、かるくふくらむもので、底面は、「上げ底」である。(83)は、平縁で、底部より口縁にかけて、開く器形である。底面は平底であるがやや不整。

☆ 施文→(82・83)は、ともに無文のものである。

☆ 色調は、(82・83)ともに、灰褐色で、胎土に両者とも、細砂を含むが焼成も良く堅い。

〔各地区出土、土器〕 (晩期)

A.P.L.68

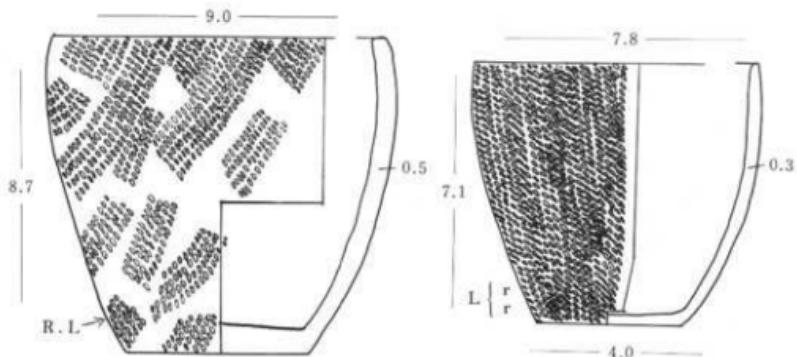
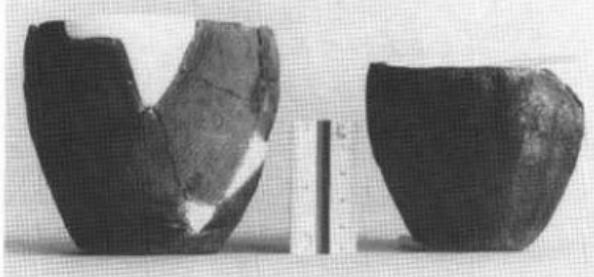
84

H x V

85

H x V

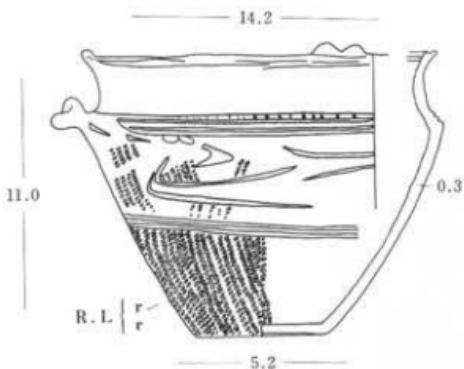
(鉢形土器)



〔鉢形土器〕—84・85 (粗製)

- ☆ (84・85) は、ともに H x V 出土の第 8 群土器 (大洞 C 2 式) である。
- ☆ 器形→ (84) は、や・不整な平縁をなすもので、口縁部は、や・内傾し、ふくらみのある胴部のもので、底面は、平底である。(85) は、口縁が平縁で、やはり内傾するもので、胴部も (84) と同様、ゆるく湾曲し、底面は「上げ底」である。
- ☆ 施文→ (84) は、口縁直下より 0 段多条の L・R 縄文が密に施文される。(85) は、前者と同様、口縁下より、0 段多条の L・R 縄文が継位に施文される。
- ☆ 色調は、(84) は、外面暗茶褐色、内面灰褐色を呈する。(85) は、外面黒色、内面黒色で煮沸痕がある。胎土・焼土は、(84) は良く、(85) は、や・良である。

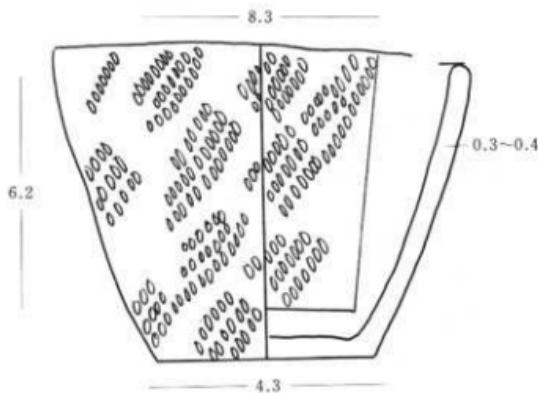
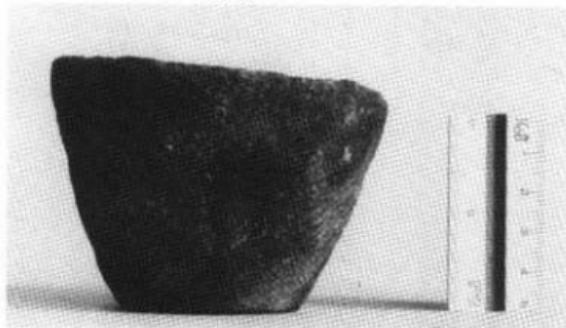
(鉢形土器)



〔鉢形土器〕-86 (粗製)

- ☆ (86) は、H 2 III 出土の第 8 群土器（大洞 C 2 式）である。
- ☆ 器形→口縁は、平縁であるが、2ヶ1対の山型突起が4対、その間に横に突出する小突起が付くもので、頸部は、無文である。肩部は、強く張り、「把手」が付くものである。「把手」の左右には、小突起が1対ずつ付く、胴部は、ふくらみ気味の器形で底面は、「上げ底」である。
- ☆ 施文→口縁内と、口唇部に沈線文があり、肩部には、3条の沈線文がある。上の沈線文には、刺突文があって、頸部と肩部を境している。肩部下の施文帶には、「X字文」一把手の下位) と磨消手法による浮彫り文があるが、胴下半にも同じ原体による繩文が施文されている。
- ☆ 色調は、器内外とも黒褐色である。胎土・焼成は良く堅緻である。

(鉢形土器)



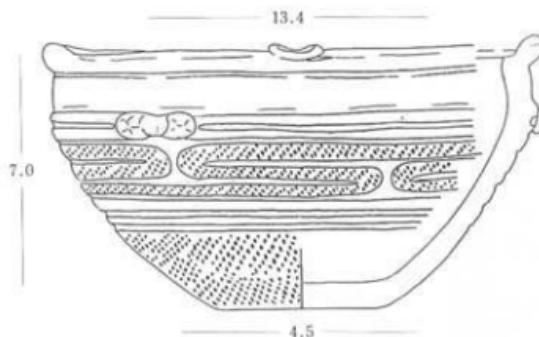
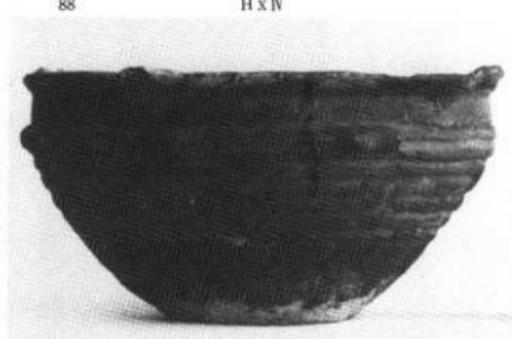
〔鉢形土器一小形〕 -87 (粗製)

- ☆ (87) は、H 2 III出土の第8群土器(大洞C 2式)である。
- ☆ 器形→口縁は、平縁であるが、や、不整である。底面は平底であるが、この底面よりふくらみを若干もちらながら口縁にいたる器形であるが、口縁はや、内傾する。
- ☆ 施文→口縁直下より、0段多条のL・R繩文が施文されるものである。
- ☆ 色調は、暗褐色で内面上半は灰黒色、下半は明黄褐色である。

88

H x W

（鉢形土器）



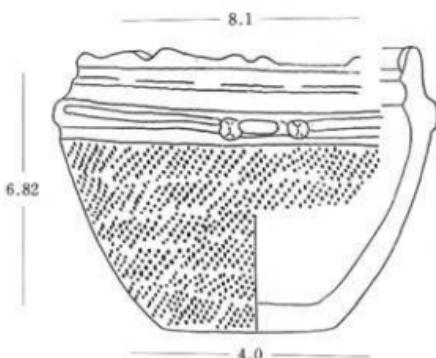
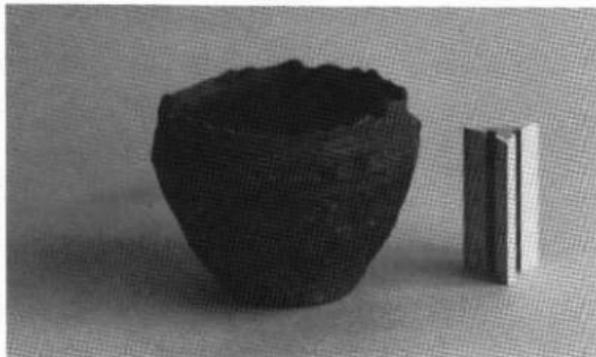
〔鉢形土器〕-88（粗製）

- ☆ (88) は、H x W出土の第10群土器（大洞A式）である。
- ☆ 器形→口縁は平縁であるが、山形突起が4対付くもので、口縁は外反する。頸部は、無文帶で肩部には、2ヶ1対の粘土粒が4対つくもので、胴部は、ゆるいカーブをもち、底部に接する器形で、底面は平底である。
- ☆ 施文→胴部上半の施文帶には、「入り組み工字文」と繩文が施文され、胴中央下には、2段単節L・R繩文が付される。
- ☆ 色調は、外面黒褐色、内面上半黒褐色、下半黄褐色を呈する。胎土・焼成は良く堅い。

89

H X V

〔鉢形土器〕



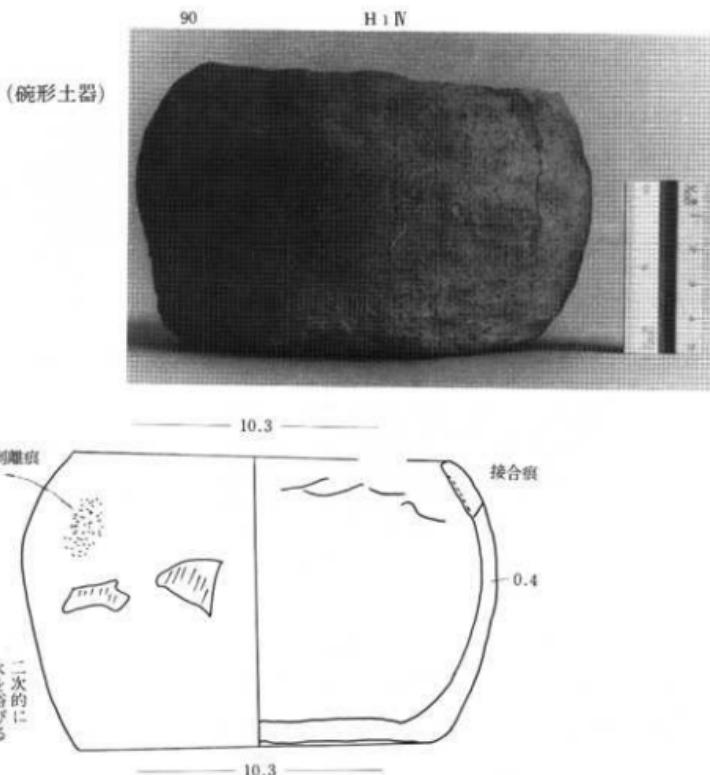
〔鉢形土器一小形〕—89（粗製）

☆ (89) は、H X V出土の第10群土器（大洞A式）である。

☆ 器形→口縁には、小突起が約10ヶ程付いたため、波状口縁をなし、やや外反する。肩部が張り、横に突出する2こ1対の粘土粒が4対つき、胴部はややふくらむ器形で、底面は、やや「上げ底」である。

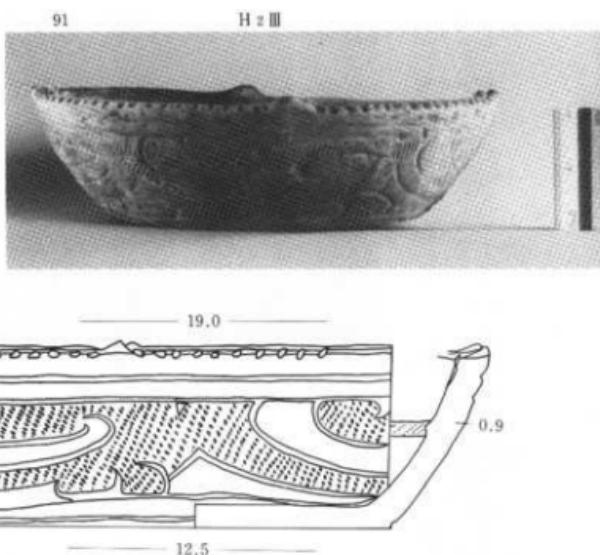
☆ 施文→口縁下に2条、肩部に2条の沈線文がめぐり、肩部の沈線文は、粘土粒間を連結する。また、2この粘土粒の間は短沈線がある。その下にさらに沈線文がめぐり、施文帯を区画し、胴部には、0段多条のL・R繩文が施文される。

☆ 色調は、外面黒褐色、内面上半黒褐色、下半黄褐色を呈する。胎土・焼成は良い。



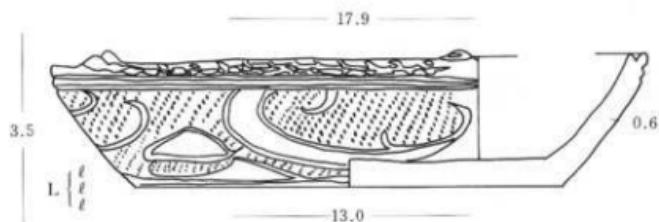
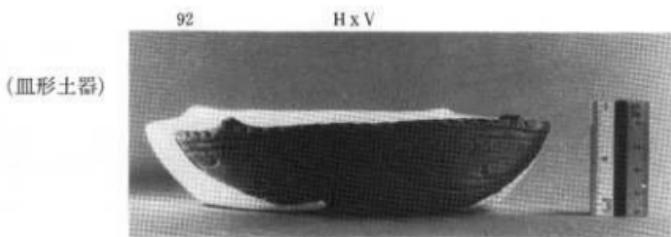
〔碗形土器〕—90（粗製）

- ☆ (90) は、H 1 IV 出土の第 8 群土器（大胴 C 2 式）であろう。
- ☆ 器形→口縁は、平縁であるが、きわめて不整なもので、内傾する。肩部は、まるく、胴部もふくらむものであるが、底面径が大きく安定するものである。（註）このものの型式を決定するきめ手はないが、口縁部が内傾していることに着目した。
- ☆ 施文→無文土器である。成形は、粗雑で、整形のため、ヘラケズリのあとが斜左下、横方向に認める。なお、器内面には、内接痕が認められる。
- ☆ 色調は、内外とも明燈色で、二次的に火を浴びた斑点がある。胎土・焼成はや、不良である。



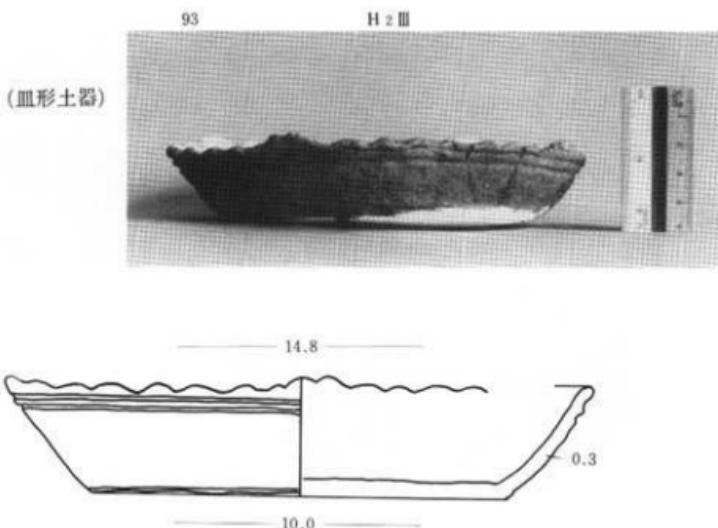
〔皿形土器〕—91（精製）

- ☆ (91) は、H 2 III出土の第7群土器（大胴C 1式）である。
- ☆ 器形→口縁には、刻目があり、縦形の小突起が4対付くもので、口縁は外に開く、胴部はゆるいカーブで、底径は大きいものである。底面は、平底であるが、や・中高である。
- ☆ 施文→口唇部には、沈線文がめぐり、小突起間を連結し、口縁下の内面にも沈線文が1条めぐる。さらに、胴部中央の内面には、隆起帯があって、L・R 繩文を付している。外面には「X字状文」が施文され、2段単節L・R 繩文がある。また、底部直上にも2条の沈線文が施文される。
- ☆ 色調は、外面黄褐色、内面淡黄褐色である。胎土・焼成とも最良である。



〔皿形土器〕—92（精製）

- ☆ (92) は、H x V出土の第8群土器（大洞C2式）である。
- ☆ 器形→口縁は、刻目文のため小波状を呈する。口頸部は、わずかに外反する。
- 胸部は、かるく、ふくらむ器形で、底面は平底である。この土器も底面径は大きいものである。
- ☆ 施文→口縁には、刻目文があり、口唇部には沈線文が刻目文と接して山型に施文される。口縁直下には2条の沈線文がめぐり、底部直上の沈線文（2条）で施文帯を区画する。施文帯には、曲線文と浮文があって、その上には、2段單節L・R繩文が施文される。
- ☆ 色調は、外面明黄褐色、内面も同様である。胎土・焼成は最良で堅い。



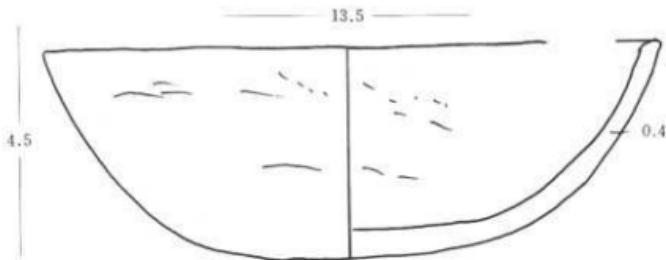
〔皿形土器〕—93（精製）

- ☆ (93) は、H 2 III出土の第7群土器（大洞C1式）である。
- ☆ 器形→この土器は、口縁が小波状を呈するが、二叉山型突起が4こ配置され、その間に、小山型突起が付くものである。口縁は、やや内傾気味のもので、胴部は、わずかにふくらむ器形で、底面は、平底のものである。このものも底径の大きいのが特徴である。
- ☆ 施文→口縁直下に平行沈線文が2条、底部上にも2条の沈線文が施文されるが、胴部は無文である。
- ☆ 色調は、外面茶褐色、内面明赤褐色を呈する。胎土・焼成とも良く堅い。

94

H x V

(皿形土器)



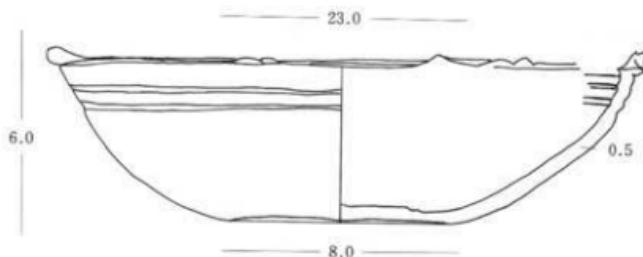
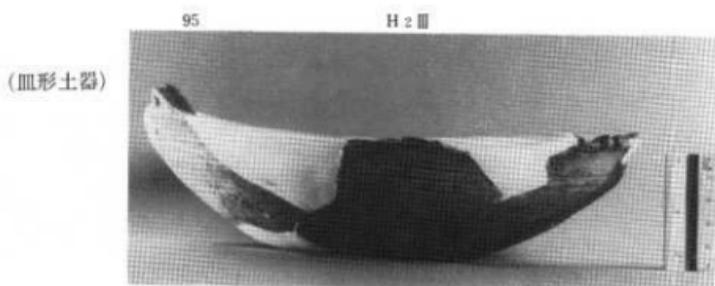
〔皿形土器〕—94（粗製）

☆ (94) は、H x V出土の第8群土器（大洞C2式）である。

☆ 器形→口縁は平線なるも、不整である。口頸部は、わずかに外反気味で、胸部は、かるくふくらむ器形である。底面は、「丸底」である。

☆ 施文→無文土器で二次的に火を浴びた黒色の斑点がある。

☆ 色調は明黄褐色で、内面暗褐色を呈する。胎土に砂粒を多く含むが焼成は良い。



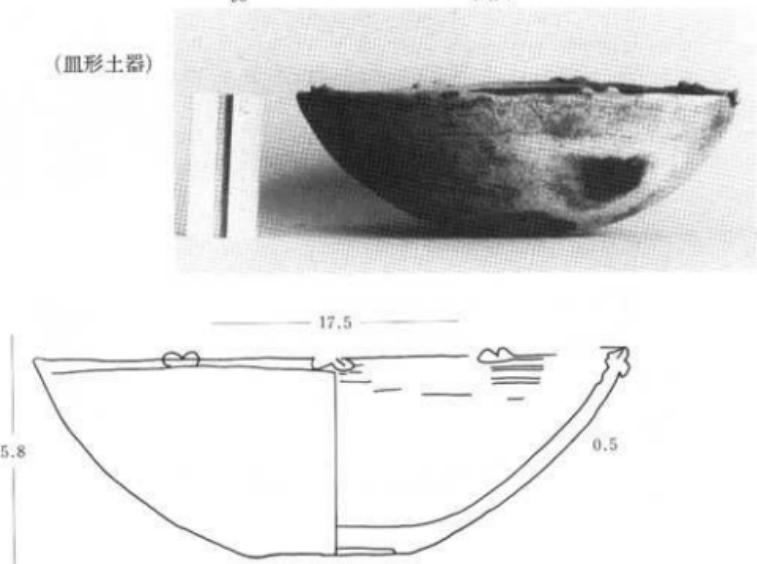
〔皿形土器－大形〕－95（精製）

- ☆ (95) は、H 2 Ⅲ出土の第8群土器（大洞C 2 式）である。
- ☆ 器形→口縁には、縦位に二叉に分かれた山型突起があり、さらに2ヶ1対の突起を付すもので、波状口縁である。口頸部は外反し、肩部がやや張るもので、胸部は、わずかにふくらむ器形である。底面は、「上げ底」である。
- ☆ 施文→口縁直下に沈線文が1条、頸部は無文帶で、肩部には、2条の平行沈線文がめぐるが胸部は、無文である。この土器は、朱ぬり土器である。
- ☆ 色調は、外面暗赤黒色、内面明黄褐色一部黒色を呈する。胎土・焼成は最良なるも軟質に焼かれている。

96

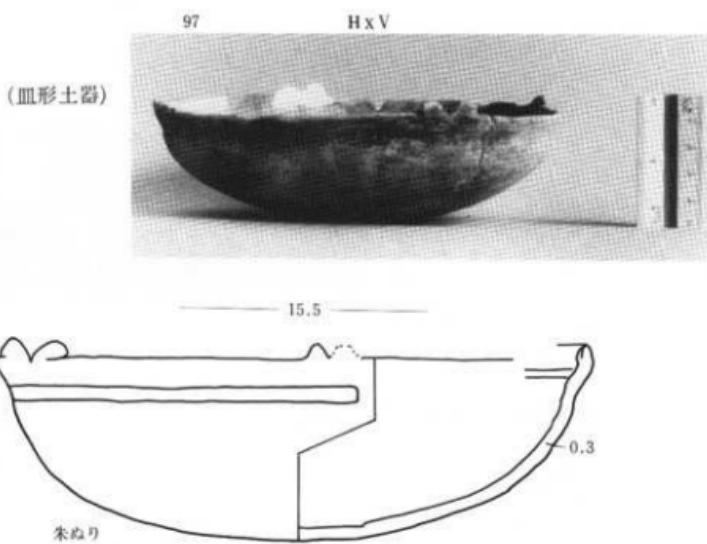
H x V

〔皿形土器〕



〔皿形土器〕—96（精製）

- ☆ (96) は、H x V 出土の第10群土器（大洞A式）である。
- ☆ 器形→口縁は平縁で、口縁には2ヶ1対の小突起を8対つくもので、口縁はわずかに内傾し、肩部は、まるくふくらむ器形で底面は、「上げ底」である。
- ☆ 施文→外面の口縁直下に、細く浅い沈線文が1条あり、そのほかは無文朱ぬりである。内面の口縁直下に沈線文が1条めぐり、その一部が突起の一つに山形にのびるものである。また、口唇部にも1条の沈線文がある。
- ☆ 色調は、外面黄褐色、一部黒色、内面明赤褐色を呈する。胎土・焼成は最良なるも軟質である。



〔皿形土器〕—97（精製）

- ☆ (97) は、H x V 出土の第10群土器（大洞A式）である。
- ☆ 器形→口縁は、平縁であるが、2こ1対の突起を4対つけるもので、口頸部は、外反し、肩部は、まるく張る器形で、底面は、「丸底」のものである。
- ☆ 施文→器外面の口縁直下には、太く浅い沈線文が1条めぐるほかは無文朱ぬりである。器内面には、口縁直下に太い沈線文がめぐり、その沈線文から継ぎの短沈線が、口縁突起の片方に突出するものである。
- ☆ 色調は、器外面黄褐色、内面黄赤褐色を呈する。胎土・焼成とも最良であるが軟質に焼かれている。

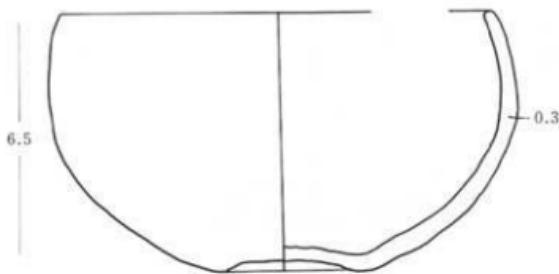
98

H x V

（碗形土器）

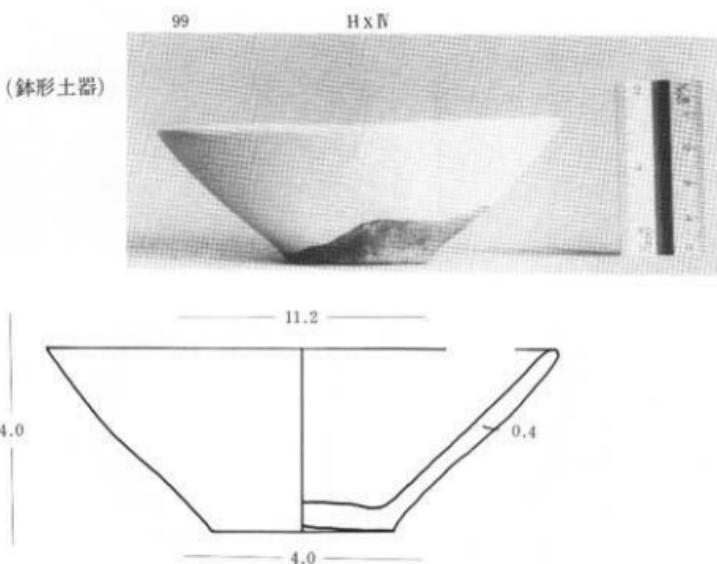


11.0



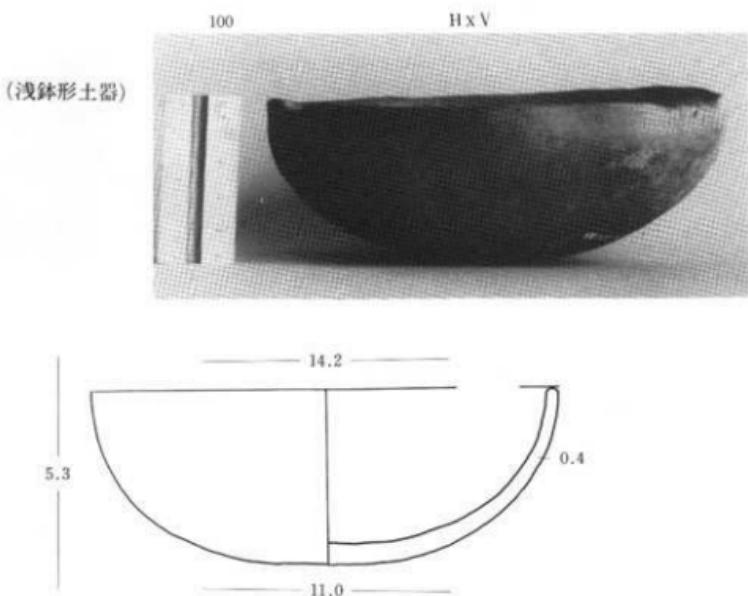
〔碗形土器〕—98（粗製）

- ☆ (98) は、H x V 出土の第10群土器（大洞A式）である。
- ☆ 器形→口縁は平縁のもので、強く内傾する。口縁から胴部へかけて、まるくふくらむもので、最大幅部は、胴部中央上にある器形である。底面には、低く円形の四脚がつくものである。
- ☆ 第9次発掘では、同類は、2件出土している。なお、出土数がきわめて少ないタイプのものである。
- ☆ 施文→無文土器で、ナデ方向は横方向である。
- ☆ 色調は外面灰赤褐色、内面灰黑色を呈するが一部（内外とも）黒色で二次的に火を浴びている。胎土・焼成は良いが、や・軟質である。



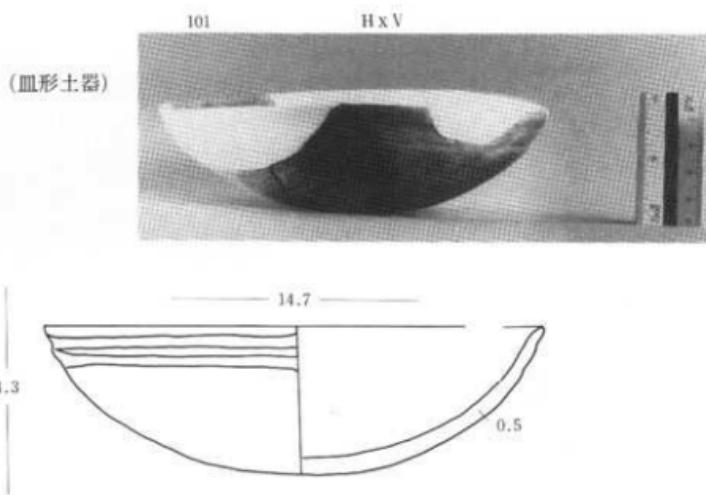
[鉢形土器] -99

- ☆ (99) は、H x W 出土の第3群土器（十腰内I式）である。（但し、型式決定のきめ手は底部の形態のみである。）
- ☆ 器形→このものは、底部および胴部の一部のみ現存するもので、正確な器形は不明であるが、胴下半は、ややふくらみ底部に接するもので、底面は「上げ底」である。なお、底部は、高台状である。
- ☆ 施文→現存部は無文であるが、他は不明。
- ☆ 色調は、内外とも赤褐色で、胎土・焼成は最良であるが軟質である。



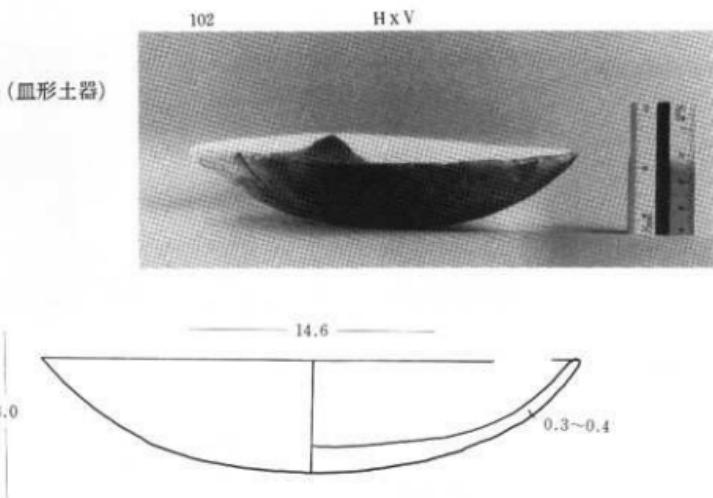
〔浅鉢形土器〕—100（粗製）

- ☆ (100) は、H x V 出土の第 8 群土器（大洞C 2 式）である。
- ☆ 器形→口縁は平線なるもや、不整、口頸部は、内傾し、肩部はふくらむもので、最大幅部は、肩部にある器形である。なお底面は、丸底である。
- ☆ 施文→無文土器で、ナデ方向は横方向である。
- ☆ 色調は、外面黒褐色、内面暗褐色、一部黒色を呈する。胎土・焼成は良いが軟質である。



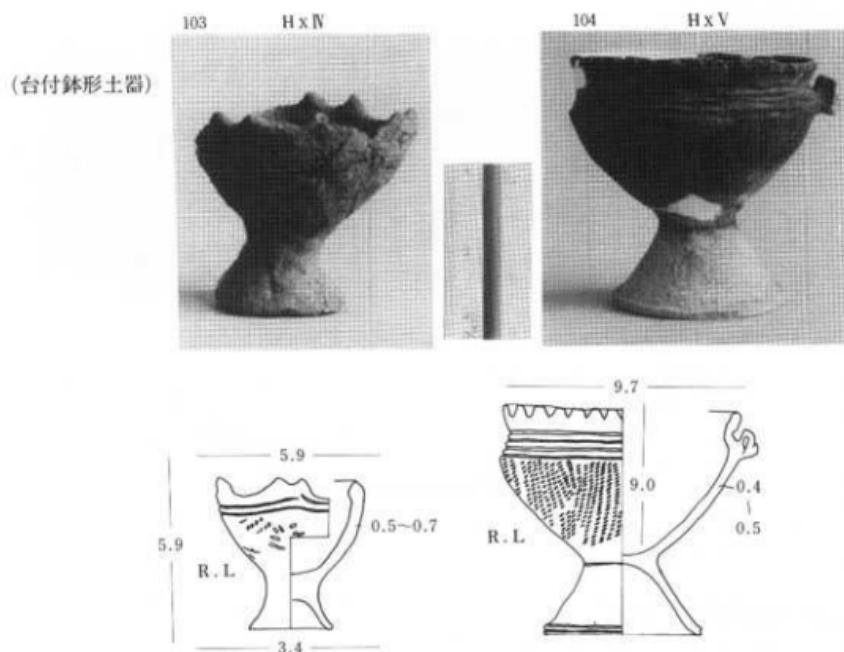
〔皿形土器〕-101（精製）

- ☆ (101) は、H x V 出土の第10群土器（大洞A式）である。
- ☆ 器形→口縁は平線で、口頸部は、わずかに外反する。肩部は、張り気味で、胴部は、わずかにふくらむもので底面は、「丸底」である。
- ☆ 施文→口縁直下に太く浅い沈線文が2条めぐるほかは無文である。内面にも口縁下に太く浅い沈線文がめぐるものである。
- ☆ 色調は、外面黒褐色、内面は、黄褐色一部黒褐色を呈する。胎土・焼成は良い。



〔皿形土器〕-102（精製）

- ☆ (102) は、H x V 出土の第10群土器（大洞A式）である。
- ☆ 器形→口縁は平線で、底面は「丸底」であって、皿形の中でも最も浅いタイプである。
- ☆ 施文→無文土器である。器内外に整形のためかケズリが認められる。
- ☆ 色調は、内外面とも暗赤褐色で一部に黒色の斑点がある。胎土・焼成とも最良である。

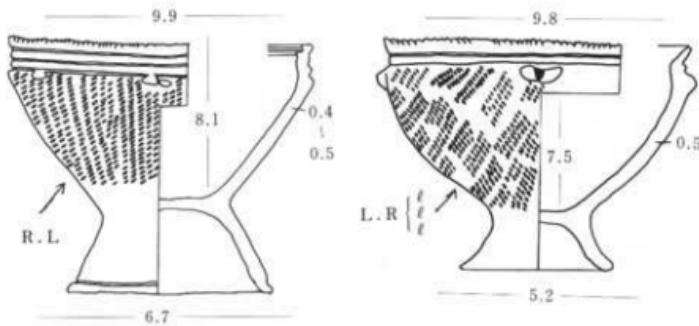
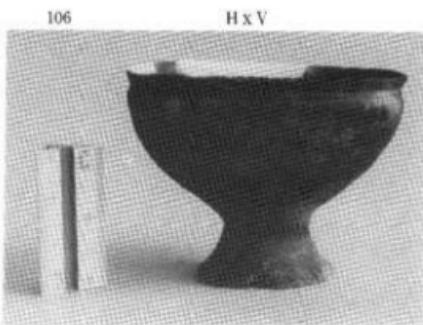
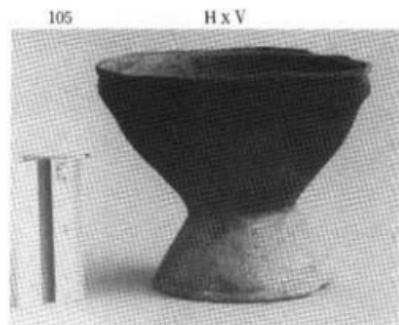


〔台付鉢形土器〕—103・104 (粗製)

- ☆ (103) は、Hx IV出土の第7群土器(大洞C1式)、(104) は、Hx V出土の第7群土器(大洞C1式)である。
- ☆ 器形→(103) は、口縁が波状口縁で、2こ1対の突起が、4対程つくものらしい。口頸部は、や、内傾し、胴部は、ふくらむ器形である。台部は、末広がりで、このものとしては高い台部である。(104) は、平縁で口頸部は外反し、肩部が張るもので、「把手」が付くものである。胴部はや、ふくらみのある器形である。台部は、末広がりで高い台部をつけている。
- ☆ 施文→(103) は、肩部に2条の細い沈線文が平行し、L・R繩文が胴部に付くが他は無文、(104) は、口縁部に逆山型の刻目があり頸部～肩部には、4条の沈線文がめぐる。胴部には、0段多条のR・L繩文が施文され、台部下端には、2条の沈線文が施文される。
- ☆ 色調、(103) は、内外面とも明赤褐色、(104) は、外面灰黒色、内面上半灰黒色、下半黄褐色を呈する。胎土・焼成(103) は、や、不良(104) は良いもので、(103) は、整形が粗雑である。

〔各地区出土、土器〕 (晩期)
 (台付鉢形土器)

A.P.L.87



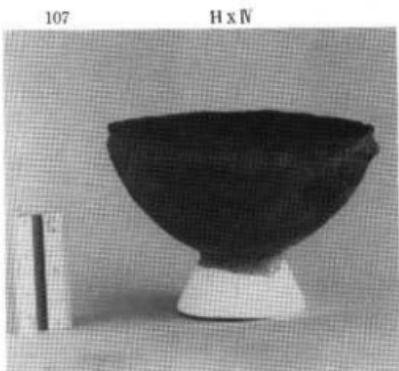
〔台付鉢形土器〕 -105・106 (粗製)

☆ (105) は、H x V出土の第7群土器(大洞C1式)、(106) は、H x V出土の第7群土器(大洞C1式)である。

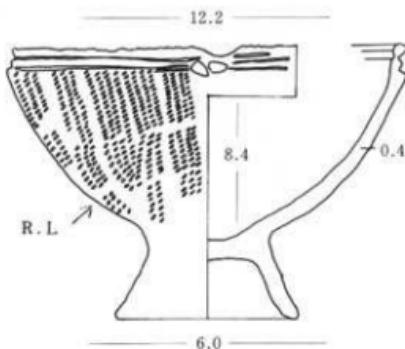
☆ 器形→ (105) は、口縁は、平縁で肩部がやや張り、胴部は、わずかにふくらむ器形で台部は末広がりであるが、多少ふくらむ台部である。(106) は、口縁は、小波状で外反し、肩部は、まるくふくらみ、胴部もふくらみのある器形で、台部は末広がりであるが下端が開く台部である。

☆ 施文→ (105) は、口縁に刻目文、頸部～肩部に3条の沈線文、その下に小粘土粒が3対つるもので、胴部には、0段多条のL・R繩文が施文される。台部下端にも1条の沈線文がある。(106) は、口縁に刻目文、頸部に2条の平行沈線文があり、肩部には、3対の小突起を配し、胴部には、0段多条のR・L繩文が施文される。台部は無文。

☆ 色調は、(105) は、外面黒褐色、内面灰黄褐色、台部は赤褐色である。(106) は、外面黑色、一部赤褐色、内面灰黑色で胎土・焼成は(105) は、良であるが、(106) は、やや不良である。

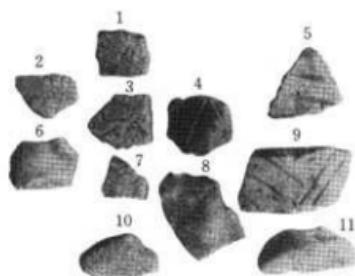


(台付鉢形土器)



〔台付鉢形土器〕-107（粗製）

- ☆ (107) は、H X IV 出土の第7群土器（大洞C1式）である。
- ☆ 器形→口縁は、小波状を呈し、口頸部が、や、外反するもので、肩部が段をもって張り胴部は、ふくらむ器形である。また、台部は、欠失している。
- ☆ 施文→口縁には、細かい刻目があり小波状を呈する。頸部から肩部へかけては、2条の沈線文が施文され、その下位、(肩部)には、横に突出る2ヶ1対の粘土粒が3対つるもので、胴部には、0段多条のR・L繩文が施文される。台部は、欠失しているが、無文のものらしい。
- ☆ 色調は、外面灰褐色、内面黄褐色で、胎土・焼成は、や、良である。



- ☆ (1・3・7・10) (不明) → G14・Pits2出土 (十腰内I式)
 ☆ (2・4) → G10・Pit9出土 (型式不明)
 ☆ (5・6・8・9) → G14・Pit39出土
 (5・6・9 → 十腰内I式)
 { 4 → 十腰内I式
 8 → 晩期 }
 (註) { → G14 = グリット14の意。
 → Pits2 = 柱穴の番号。即ち柱穴内出土の意。
 → いずれもV層上面が確認面である。 }
 (以下も同様)

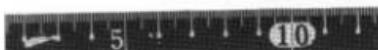
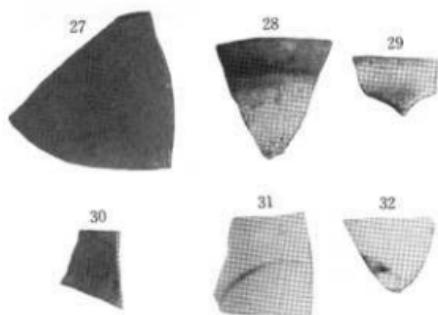
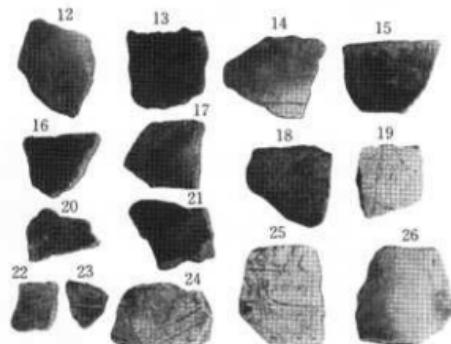
☆ (12・16・20・22・23) → G10・Pit11出土
 (十腰内I式)

☆ (13・17・21・24) → G10・Pit4出土

{ 13・17・21 → 大洞C1式
 24 → 十腰内I式 }

☆ (14・15・18・19・25・26) → G9・Pit48出土

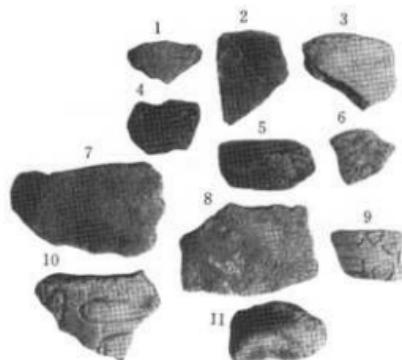
{ 14・15・18・19・25 → 十腰内I式
 26 → 中間型式 }



- ☆ (27) → H2Ⅲ出土 (須恵器) → 長頸壺
 ☆ (28) → G13Ⅲ出土
 ☆ (29) → G40Ⅰ出土
 ☆ (30) → G9Ⅰ出土 } 陶器 (産地不詳)
 ☆ (31・32) → (G10Ⅰ出土) 染付磁器
 (18~19C 伊万里)

[遺構に伴なって出土した土器]

B.P.L.2



☆ (1・4・7・10) → G13 Pit 2 出土

$\left\{ \begin{array}{l} 1 \cdot 4 \cdot 7 \\ 10 \cdot 3 \cdot 6 \end{array} \right\}$ → 型式不明
→ 十腰内 I 式

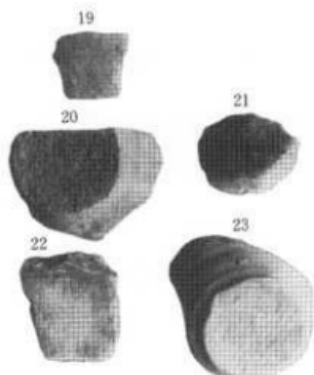
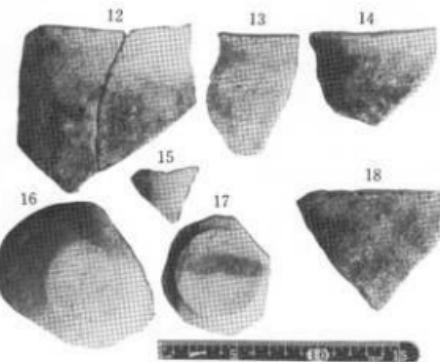
☆ (2・5・8・9・11) → C14 Pit 55 出土

$\left\{ \begin{array}{l} 2 \\ 5 \cdot 8 \cdot 11 \end{array} \right\}$ → 十腰内 I 式
→ 晩期 (型式不明)

☆ (12~18) → G42 (異形遺構内出土)

$\left\{ \begin{array}{l} 12 \cdot 13 \cdot 14 \cdot 16 \\ 15 \cdot 17 \end{array} \right\}$ → 大洞 C1 式
→ 土師器 (3 箱)

☆ (18) → 繩文土器



☆ (19・20・22) → G13 I a 出土

$\left\{ \begin{array}{l} 19 \cdot 20 \\ 22 \end{array} \right\}$ → 土師器 (甕)
大洞 C2 式 (M13 I a 出土)

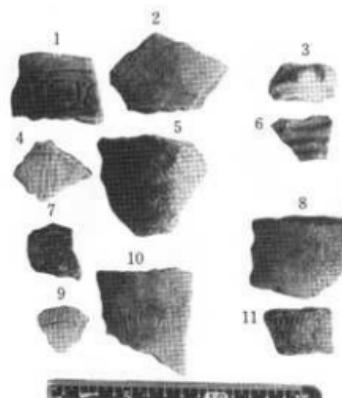
☆ (21・23) → 2 号 H 内出土 (G13)

$\left\{ \begin{array}{l} 21 \\ 23 \end{array} \right\}$ → 土師器 (环)
→ 土師器 (环)

(注) → 2 号 H = 2 号住居址の意

[遺構に伴なって出土した土器]

B.P.L.3



☆ (1・2・4・5・7-11) → 5号土壙内出土

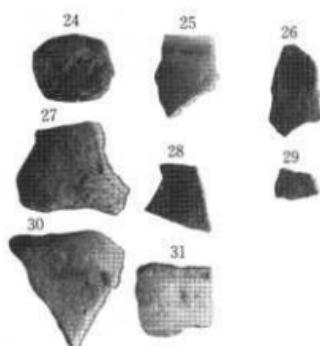
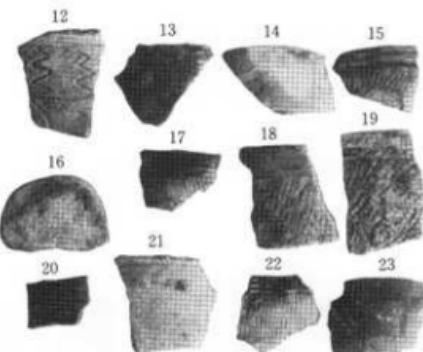
$\left\{ \begin{array}{l} 1 \\ 2 \\ 8 \cdot 11 \end{array} \right\}$ → 十腰内Ⅰ式
 → 中間型式(十腰内Ⅰ・Ⅱ式の中間形式)
 → 晩期?

☆ (12-23) → G9・4号土壙内出土

$\left\{ \begin{array}{l} 12 \\ 13 \cdot 14 \cdot 17 \cdot 18 \cdot 19 \cdot 21 \cdot 23 \\ 15 \cdot 20 \end{array} \right\}$ → 中間型式
 → 大洞CⅡ式
 → 大洞A式

(22) → 大洞CⅠ式

(16) → 底部



☆ (24・25・27・28・30・31) → G43・1号

井戸内

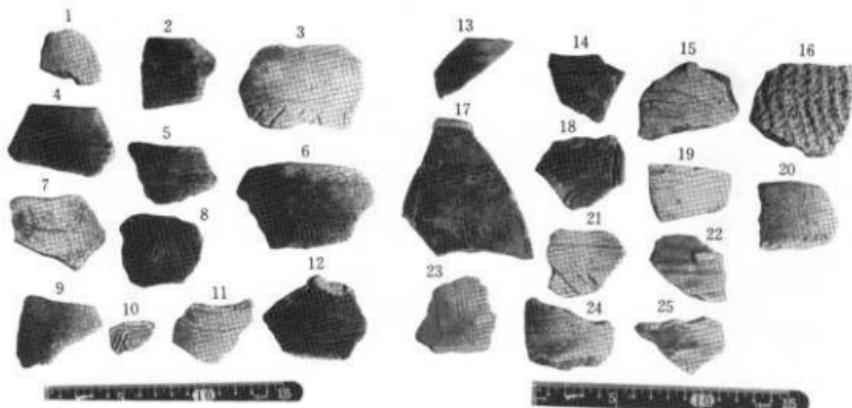
$\left\{ \begin{array}{l} 24 \cdot 27 \cdot 30 \cdot 31 \\ 25 \\ 28 \end{array} \right\}$ → 型式不明
 → 青磁 (15c)
 → 須恵器 (甕)

☆ (26・29) → G10Ⅱ出土 (鉄器片)



[遺構に伴なって出土した土器]

B.P.L.4

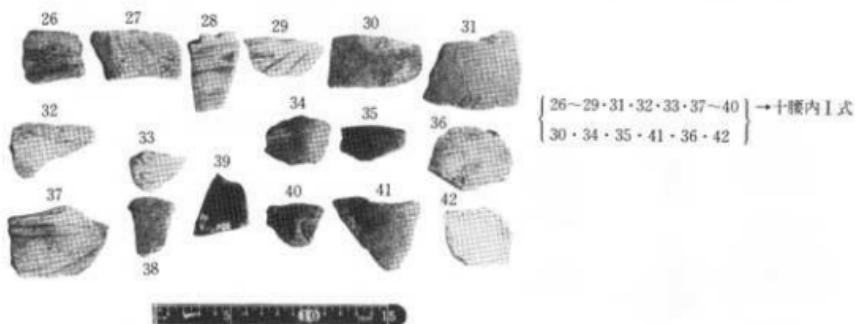


☆ (1~12) → G 9 + 3 号土壙出土

{ 1 ~ 9 + 12 } → 十腰内 I 式
10 · 11 → 型式名不明

☆ (13~25) → 1 号住居址内出土

{ 14 · 15 · 17 · 18 · 21 · 24 · 25 } → 十腰内 I 式
16 → 前期
13 · 22 · 19 → 大洞 C 2 式?
(20) → 中間型式
(23) → 土師器 (甕)

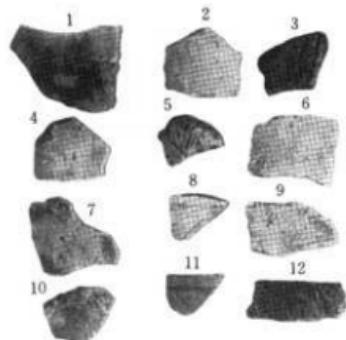


☆ (26) → G 10 · Pit 6 出土 (C 2)
☆ (27) → G 14 · Pit 32 出土 (十腰内 I 式)
☆ (28) → G 13 · Pit 26 出土 (C 1)
☆ (32) → G 10 · Pit 22 出土 (中間型式)
☆ (37) → G 13 · Pit 19 出土 (十腰内 I 式)

☆ (33 · 38) → G 10 · Pit 3 出土 (十腰内 I 式)
☆ (39) → G 10 · Pit 26 出土 (?)
☆ (29 · 34 · 40) → G 10 · Pit 21 出土 (十腰内 I 式)
☆ (30 · 35 · 41) → G 13 · Pit 41 出土 (?)
☆ (31 · 36 · 42) → G 14 · Pit 35 出土 (?)

[遺構に伴なって出土した土器]

B.P.L.5



☆ (1・4・7・10) → G13土壤Ⅱa出土

{ 1・4・7 } → 土師器(甕)
10 → 十腰内I式

☆ (2・3・5・6・8・9・11・12) →

G10土壤内出土

{ 5・8・11・3 } → 十腰内I式
2・6・9・12 → 型式名不明(12) → 十腰内I式

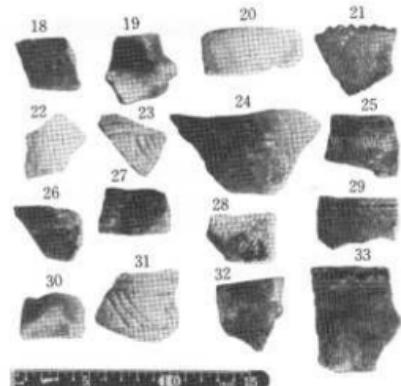
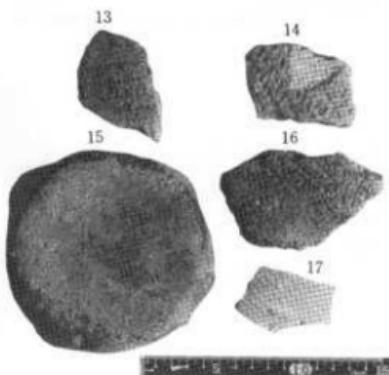


☆ (13~17) → G34・4号住居址内出土

{ 13・16 } → 十腰内I式
14 → 円筒上層式
17 → 須恵器(甕)

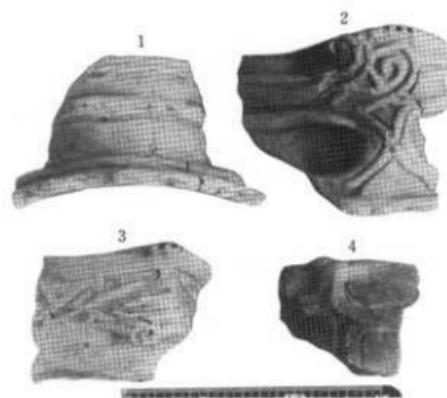
(15) → 底部

※ (13・16・15) → 焼けている土器



☆ (18~33) → 3号住居址内覆土より出土

{ 22 } → 土師器(甕)
{ 23・27・31・24・26・27 } → 十腰内I式
{ 18・19・30・20・28・32 } → 大洞C2式
{ 21・25・29・33 } → 大洞C1式

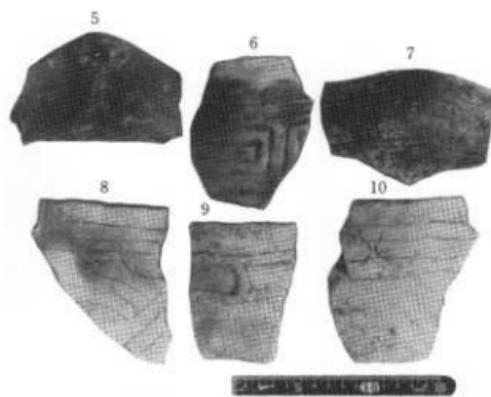


☆ (1~4) → 第3群土器 (十腰内I式)

☆ (4) → 亂起線文のあるタイプ

☆ (1~3) → 器台

☆器形→ (4) → 变~深鉢

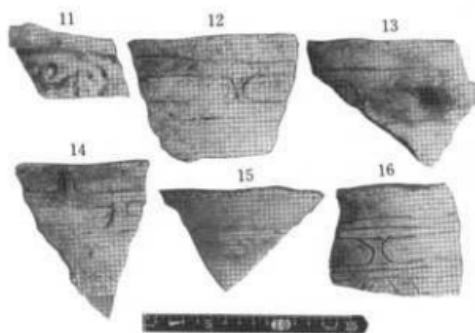


☆ (5~10) → 第3群土器 (十腰内I式)

☆ (5) → 乗下する亂起線文があるタイ

ブ

☆器形→深鉢~變形



☆ (11~16) → 第3群土器 (十腰内I式)

☆ (14) → 亂起線文があるタイプ

☆器形→深鉢~變形